㈶大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第46集

一般国道26号線第二阪和国道建設事業に伴う

井関・亀川遺跡発掘調査報告書

―大阪府阪南市石田所在―

１９９９年8月

財団法人　大阪府文化財調査研究センター

調査区遠景（大阪湾のぞむ）

調査区遠景（井関・亀川遺跡）

井関遺跡全景

亀川遺跡全景

井関遺跡　石積み遺構15全景

井関遺跡　石積み遺構15断割り全景

序　　文

大阪府阪南市自然田地区は、昭和２７年の鳥取池の決壊によって、不幸にも一夜にして水没するという災害に見舞われた地域です。現在ではすっかり水田の広がる穏やかな土地に回復していますが、今回この自然田地区に一般国道２６号線第二阪和国道の延伸による道路建設が計画され、その予定地内に存在する井関・亀川遺跡の発掘調査が実施されることとなりました。本報告はその発掘調査の成果をまとめたものであります。

発掘調査では当初の予想に反して、水と闘いながらもこの地で暮らし続けた人々の生活が、弥生時代や古代のみならず中世や近世に至るまで連綿と営まれていたことが明らかとなりました。

付近には玉田山古墳群の存在が知られる他、波太神社が式内社として知られるなど古くから人々の営みが色濃く認められていましたが、この発掘調査成果は、実態に不明な点が多かった自然田地区の考古学的資料の空白部分を解明し、阪南市域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものと確信しております。

本調査を実施するに当たりまして、建設省近畿地方局浪速国道工事事務所並びに大阪府の関係諸機関の多大なご理解とご協力を賜りますとともに、阪南市二国推進室をはじめ地元の皆様のご協力を賜りましたことに深く感謝の意を表します。　今後とも文化財に対してより一層のご理解を賜りますとともに、当センターの事業に変わらぬご支援を賜りますようお願いいたします。

平成１１年８月

財団法人　大阪府文化財調査研究センター
理事長　坪　井　清　足

例　　言

1　本書は第二阪和国道（国道２６号線）建設工事に先立つ、井関・亀川遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は建設省近畿地方局浪速国道工事事務所・大阪府土地開発公社・大阪府道路課幹線室の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、現地調査を（財）大阪府文化財調査研究センターが実施した。

3　本調査は、当センター調査部長井藤　徹、参事兼調整課長中西靖人、調整係長福田英人、南部調査事務所長藤田憲司のもと、試掘調査は調査第一係長西口陽一・同技師服部美都里、本調査を服部が担当した。遺物の写真撮影は、主任技師立花正治が行った。

4　現地調査は、平成８年（1996）４月20日から同年８月31日まで実施した試掘調査の結果を受け、本調査を平成９年（1997）５月19日に着手し、同年８月25日に完了した。遺物整理並びに報告書の作成作業は、当センター南部調査事務所において引き続き平成10年度事業として実施し、平成１１年３月に完了した。

5　調査・整理作業に当たり、大阪府教育委員会堀江門也氏・芝野圭之助氏・広瀬雅信氏・松岡良憲氏・上林史郎氏・杉本清美氏、阪南市教育委員会三好義三氏・田中早苗氏・上野　仁氏、泉南市教育委員会仮屋喜一郎氏・石橋広和・岸和田市教育委員会瀬尾正人氏のご教示を得るとともに、当センター井藤暁子・岡本圭司の協力、助言を得た。
また発掘調査・整理作業には以下の協力を得た。大井裕美子・岡田竜彦・小川佐起子・加茂幸彦・久禮孝志・黒川敦美・迫田信子・中山由佳里・樋口順子・福山　綾・松井晴美・松村より子・若井キヨ子・和田しづか（順不同）
記して感謝の意を表したい。

7　本書の編集は服部が行った。

凡　　例

1　本書の標高は全てＴ．Ｐ．＋（東京湾標準潮位）を用い、ｍは省略している。

2　本書で用いる座標値は全てkm単位である。

3　方位は国土座標第Ⅵ系の座標北を示す。

4　土器実測図の断面は、須恵器・須恵質については黒塗り、黒色土器・瓦・石器についてはスクリーントーン、弥生土器・土師器・近世陶磁器は白抜きで表示した。

5　実測図の縮尺は、全体遺構図は１/400を基本とし、各遺構断面は１/40に統一した。遺物実測図は石器については１/２を基本とし、土器は１/３である。

6　土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」1995年版に従っている。

7　本書の挿図と写真図版の遺構・遺物番号は全て一致している。煩雑さを防ぐため新たに番号を付与し統一した。

井関・亀川遺跡発掘調査報告書

本 文 目 次

序文
例言・凡例
第一章　調査に至る経過と調査周辺の環境……1
　第一節　調査に至る経過……1
　第二節　遺跡の環境……1
第二章　調査成果……5
　第一節　調査方法……5
　第二節　井関遺跡調査結果……5
　第三節　亀川遺跡調査結果……20
第三章　まとめ……33

挿 図 目 次

第１図　井関・亀川遺跡調査位置図……2
第２図　周辺地形図及び遺跡分布図……3
第３図　井関・亀川遺跡基本層序……6
第４図　井関遺跡遺構図（1）
　弥生時代 溝１ 平・断面図……7～9
第５図　弥生時代 溝１ 出土遺物（1）……11
第６図　弥生時代 溝１ 出土遺物（2）……12
第７図　弥生時代 土坑 2・3・4 平・断面図……14
第８図　井関遺跡遺構図（2）
　奈良時代 溝５、鎌倉時代以降 土坑 6・7・16（試掘トレンチ）平・断面図　出土遺物 ……16
第９図　鎌倉時代以降 溝１、土坑 8・9・10・11・12・13・14 平・断面図　出土遺物 ……17
第10図　江戸時代以降 石積み遺構15 平・断面図　出土遺物……18
第11図　亀川遺跡遺構図……22～23
第12図　弥生時代 溝 1・2　鎌倉時代以降 溝９ 断面図　出土遺物……24
第13図　弥生時代 土坑３ 平・断面図　出土遺物……26
第14図　鎌倉時代以降 掘立柱建物４、
　焼土坑 5・6・7・8 平・断面図　焼土坑５、包含層 出土遺物……27
第15図　江戸時代以降 溝１、
　土坑11・13、井戸12・14・15・16・17・18 平・断面図　井戸18 出土遺物 ……29
第16図　江戸時代以降 土坑19・21、井戸20・22 平・断面図　土坑19、井戸20 出土遺物（1）……30
第17図　江戸時代以降 土坑19、井戸20　出土遺物（2）……31

表　目　次

表１　井関遺跡出土遺物一覧表……34
表２　亀川遺跡出土遺物一覧表……35

写真図版目次

図版１　阪南市航空写真
図版２　試掘調査区全景
図版３　試掘調査区全景
図版４　井関遺跡
図版５　井関遺跡
図版６　井関遺跡
図版７　井関遺跡
図版８　井関遺跡　出土遺物（１）
図版９　井関遺跡　出土遺物（２）
図版10　井関遺跡　出土遺物（３）
図版11　井関遺跡　出土遺物（４）
図版12　井関遺跡　出土遺物（５）
図版13　井関遺跡　出土遺物（６）
図版14　井関遺跡　出土遺物（７）
図版15　亀川遺跡
図版16　亀川遺跡
図版17　亀川遺跡　出土遺物（１）
図版18　亀川遺跡　出土遺物（２）
図版19　亀川遺跡　出土遺物（３）
図版20　亀川遺跡　出土遺物（４）
図版21　亀川遺跡　出土遺物（５）
図版22　亀川遺跡　出土遺物（６）
図版23　亀川遺跡　出土遺物（７）

第一章　調査に至る経過と調査周辺の環境

第一節　調査に至る経過

昭和63年に決定された阪南市域都市計画により、阪南市自然田から泉南郡岬町淡輪までの第二阪和国道の延伸が事業化された。

第二阪和道（国道26号線）は、大阪湾岸に沿った泉州地域の南北幹線道路で、紀州街道を基とした旧国道26号線（現府道大阪和泉泉南線）のバイパスとして計画された道路である。昭和58年に堺市から阪南市自然田の間33kmが供用され、地域社会の基盤整備を形成する大阪南部の幹線道路となっている。大阪府南部に位置する阪南市は市政施行後、阪南丘陵開発事業等の住宅地の増加に伴い、都市間の交流拡大と従来からの交通渋滞の緩和を図る事が急務となり、さらに以南の岬町域開発とともに道路交通網整備事業は地元地域から切望されるに至っている。

当該地区は昭和62年度当時、阪南町教育委員会による埋蔵文化財分布調査によってその存在が知られ、工事に先立ち道路予定地において試掘調査を当センターが実施する事となった。試掘調査は平成８年４月から８月まで実施した。道路予定地部分の南北500m に、東端および西端の両側と、段丘差のある部分や水路や石垣で区画された部分に、幅２ｍのトレンチを合計37箇所設定した。基本的には田畑１枚につきトレンチ１箇所を原則としたが、南北方向の確認に中央部分にもトレンチを設定し路線内の横断・縦断を網羅するよう全域の把握に努めた。（第２図）

試掘調査の結果、数時期の洪水の痕跡と弥生時代後期の溝、鎌倉～室町時代のピット、江戸時代の井戸・暗渠・溝等の遺構が検出されるに至った。その取り扱いについて再度建設省近畿地方局浪速国道工事事務所及び大阪府教育委員会との協議の結果、次年度本調査を当センターが実施する事となった。

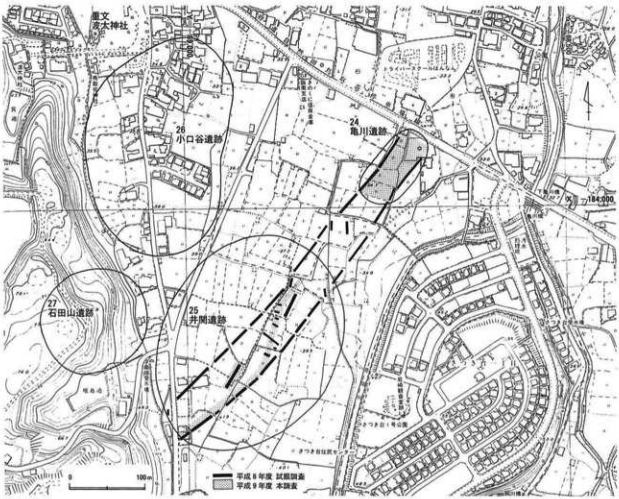
第二節　遺跡の環境

井関・亀川遺跡は大阪府阪南市石田に所在する遺跡である。府道自然田鳥取荘停車場線の南側に当たり、井関川左岸の和歌山へ通じる旧井関峠越えの街道に沿った段丘上に位置する。現在の地目は、昭和27年の鳥取池の決壊によって周辺は土砂で埋まり、整備後に水田・畑となった土地である。

調査地周辺は、重要文化財波太神社の奥宮があったと言われる伝承の地で、阪南市で最も古い桑畑村へ通じる狭小な平野部である。南東側には和泉山脈が横たわり、大阪層群により形成された丘陵地が北西方向に展開し、北西2.1kmには大阪湾が開けている穏やかな気候の地域である。阪南市では平成10年現在58箇所の遺跡が確認されている。阪南市は大阪南西部に位置し北西側は大阪湾に、南東部分は和泉山脈が占め、その間に展開する段丘面を大阪湾に注ぎ込む男里川・花折川・釈迦坊川・茶屋川が分断し、わずかに狭小な平野部が形成されている。周知の遺跡が確認される部分は、大半が和泉山脈が大阪湾に向けて形成した丘陵段丘面上とその周辺の平野部に集中する傾向が認められる。

地形の制約のためか遺跡分布は水系別にあるようにみられるが、現在の段階で、山間部や現在の集落部分と重複する部分については、下層の詳細な調査は依然充分にはなされておらず、当該地域において今後さらに埋蔵文化財包蔵地が拡大・増加することは容易に予想される。

各時代の遺跡について個別に見ると、縄文時代の遺物は、各遺跡の包含層から石器資料の増加は認め

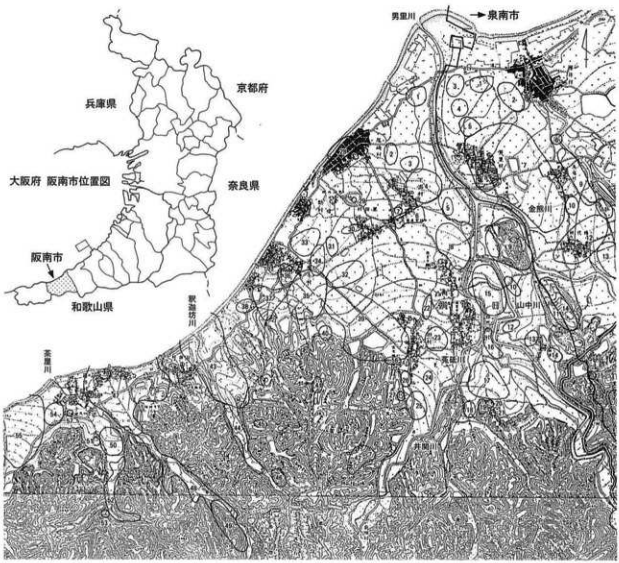


第1図　井関・亀川遺跡 調査位置図

られるものの、遺構検出には到っていない。神光寺（蓮池）遺跡採取の柳又型の有舌尖頭器と馬川北遺跡の縄文時代晩期の土器が知られるのみで、縄文時代は不明な点が多かった。当センターの平成8年度事業の第二阪和国道建設事業に伴う試掘調査において、縄文時代の土坑と、大量の縄文時代後期および晩期の土器類と石器が検出され、その後実施された発掘調査において泉州地域最大の縄文時代の集落として注目された向出遺跡は、立柱状態で検出された石棒や複数の環状土坑群で構成される大規模な縄文遺跡であることが判明した。

弥生時代も前時代同様、各遺跡の包含層からは土器・石器の出土はあるものの神光寺遺跡の方形周溝墓が検出されて以降、特筆すべき遺跡の増加は認められていなかった。今回の第二阪和国道関連の調査において前述の向出遺跡とその南側に展開する向山遺跡で弥生時代後期の住居址が検出されており、当該地域の弥生時代を検討する上での新たな資料が多く得られている。以前より知られる田山遺跡・馬川遺跡などから出土している弥生土器はいずれも中期後半から後期の遺物で、自然流路や不定形土坑等から周辺の集落の存在や、石包丁などから水田耕作が推定出来るものの、依然実態には不明点が多い。

古墳時代は前期こそこの地に造営される古墳は認められないが、中期以降は箱作古墳、後期は玉田山古墳群・塚谷古墳群・高田山古墳群と丘陵上に断続的に造営され、一定程度、一般的な畿内の様相を示している。古墳時代の集落の位置は、発掘調査における検出例は確認されていないが、6世紀以降の須



阪南市遺跡分布図

1 福島遺跡
2 尾崎清水遺跡
3 馬川北遺跡
4 馬川遺跡
5 下出北遺跡
6 下出遺跡
7 内畑遺跡
8 室堂遺跡
9 平野寺(長楽寺)跡
10 久保田遺跡
11 高田山古墳群
12 高田西遺跡
13 高田南遺跡
14 和泉鳥取遺跡
15 向出遺跡
16 向山遺跡
17 自然田遺跡
18 寺田山遺跡
19 玉田山古墳群
〔府県〕史 玉田山上方下円墳
20 玉田山遺跡
21 玉田山須恵器窯跡
22 正方寺遺跡
23 西畑遺跡
24 亀川遺跡
25 井関遺跡
26 小口谷遺跡
27 石田山遺跡
28 尾崎海岸遺跡
29 皿田池古墳
30 黒田遺跡
31 黒田西遺跡
32 黒田南遺跡
33 鳥取北遺跡
34 鳥取遺跡
35 鳥取南遺跡
36 波有手遺跡
37 西鳥取遺跡
38 戎遺跡
39 神光寺（蓮池）遺跡
40 三昧谷遺跡
41 三升五合山遺跡
42 師道谷遺跡
43 貝掛遺跡
44 金剛寺遺跡
45 塚谷古墳群
46 四郎太郎遺跡
47 箱作今池遺跡
48 飯ノ峯畑遺跡
49 井山城跡
50 箱作南遺跡
51 箱作古墳
52 茶屋遺跡
53 箱作仏屋谷石切場跡
54 田山東遺跡
55 田山遺跡
56 〔重文〕波多神社
57 〔府指〕有文 加茂神社本殿
58 〔府指〕有文 宗福寺

泉南市遺跡分布図

1 天神ノ森遺跡
2 戎畑遺跡
3 キレト遺跡
4 高田遺跡
5 男里北遺跡
6 男里東遺跡
7 男里遺跡
8 光平寺遺跡
9 長山遺跡
10 山ノ宮遺跡
11 前田池遺跡
12 幡代遺跡
13 幡代南遺跡
14 高田山古墳群
15 雨山南遺跡

第2図 周辺地形図 及び 遺跡分布図（縮尺1/4万）

恵器は市域の広範囲で散布が認められる。

奈良時代は、田山遺跡の掘立柱建物跡や製塩土器の出土、近年の調査で大量の墨書土器の出土をみた波有手遺跡など海沿いの平野部に古代の遺跡が展開している。箱作今池遺跡の掘立柱建物群はその規模から当時中心的役割を果たしていたと考えられよう。

平安時代には丘陵上で確認されることが多く、寺院造営との関連と考えられる。平野寺跡では複弁蓮華文軒丸瓦等が採取されており、各遺跡からも黒色土器や緑釉陶器の出土例も増加している。

中世以降はほぼ全ての遺跡にわたって遺構・遺物の存在が確認される。生産関係では水田耕作土と考えられる水平堆積層と畑の鋤溝や水利関係の大小さまざまな溝の検出例が多く、次いで鎌倉時代のピット群が各遺跡から検出される。箱作今池遺跡の夥しい掘立柱建物群からは風招の出土によって、集落内の寺院の存在が明らかとなった。また、文献上でしか登場しなかった山城が、集落から離れた山中に築かれており、中世戦乱期の様相を、考古学的に解明しえた。近年の阪南市教育委員会による発掘調査で新たに発見された平野寺遺跡など、多彩な中世資料の増加が認められる。

近世では和泉砂岩の石切場跡とその集落等、泉州地方独特の生産遺跡としての調査例等が顕著である。

以上が阪南市域の歴史的環境である。中世期以降集落の範囲が現在の集落とリンクする所も多く、考古学的情報の密度に差があるのは致し方ないが、近年の開発により、市域の遺跡調査成果は飛躍的に増加している。阪南市域の地理的歴史的環境は、「阪南町史」および阪南市教育委員会の既往の報告書に詳細な記述があるので、参照されたい。

引用文献

阪南町史 上巻 阪南町役場 1983年

田山遺跡・神光寺遺跡発掘調査概要　阪南町埋蔵文化財報告Ⅲ　阪南町教育委員会1986

阪南町埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ～Ⅵ　阪南町教育委員会1987～1991

阪南市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅶ・Ⅷ　阪南市教育委員会1992・1993

大阪府文化財調査概要1984年度　田山遺跡発掘調査概要報告　大阪府教育委員会1985

箱作今池遺跡　阪南市埋蔵文化財報告Ⅹ Ⅲ　阪南市教育委員会　1992

神光寺遺跡・貝掛遺跡 送水官敷設に伴う発掘調査概要　大阪府教育委員会　1992

井山城跡発掘調査報告　(財)大阪府埋蔵文化財協会報告書第20集　(財)大阪府埋蔵文化財協会1988

ミノバ石切場跡発掘調査報告書（財）大阪府埋蔵文化財調査報告書 第18輯

(財)大阪府埋蔵文化財協会1988

第二章　調査成果

第一節　調査方法

試掘調査の結果、検出された遺構の広がりは従来の井関遺跡の範囲の北側に拡大しているため、全体的に範囲を拡大して埋蔵文化財包蔵地として周知されている。また、府道自然田鳥取荘停車場線の南側については弥生時代以降の遺構が検出されたため、平成10年、新たに亀川遺跡として周知された遺跡である。

現地調査は、調査区を着手順に便宜上４区に分けて実施したが、報告には煩雑となるため地区別呼称を用いず、井関遺跡と亀川遺跡の２遺跡に分けて報告する。井関遺跡は、協議の結果、弥生時代の溝の確認調査を主眼として本調査を実施する事となったため、北流する溝を検出した試掘トレンチ部分に沿って幅８ｍの調査区を設定し、溝が西方向に蛇行した時点で調査区を拡張して実施した。（第１図）亀川遺跡は新規発見の遺跡で、東西トレンチ共に中世遺構の広がりが確認されたため、全域を発掘調査する事となった。

調査区には５ｍのメッシュによる地区割りを設定し遺物の取り上げを行った。調査の迅速化を図るため２回の航空測量を実施し、　Ｓ＝1/20と1/100に図化した。

調査は現代耕作土とその床土を重機により除去した後、以下の遺物包含層ごとに人力で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

第二節　井関遺跡調査結果

１．基本層序

調査区が283ｍと長く北方向に傾斜をもち、旧地形の傾斜の他に現代の水田区画による畦畔が階段状を呈するため、地表面において南端はT.P.42.6ｍ、北端T.P.38.1ｍを測る。堆積状況は基本的には大きく４層からなる。概要は以下のとおりである。

第一層は現代耕土・床土である。

第二層は第一層の直下、全域で中世包含層が検出される。灰褐色のシルト層が層厚0.05～0.3ｍで水平に堆積しており、最下部にマンガンの沈着が認められる。また出土遺物が極端に少ない事から、中世期の耕作土層の可能性が高い。調査区南端は第二層直下において地山層が検出された。

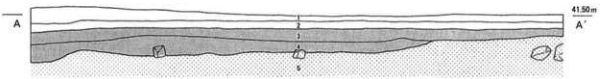
第三層は弥生時代の包含層である。傾斜部分や、中世期に削平を受けずに残った部分でのみ一部確認され、にぶい黄褐色を呈し小礫を若干含むシルト層である。第三層直下では弥生時代後期の溝や土坑等の遺構が検出される。

第四層は地山層である。北西方向に砂礫層とシルト層が交互に堆積する状況がみられる。狭小な平野部が中世期に開発されるまでの自然地形の形状を示すものである。（第３図上）

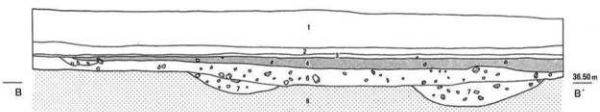
２．遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、大別して３時期である。主要な遺構は弥生時代の溝と土坑、鎌倉時代以降の土坑、江戸時代以降の石積み遺構である。（第４図）

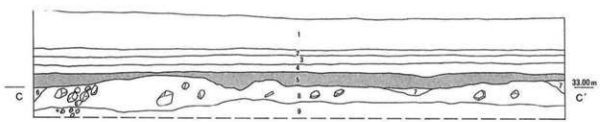
本報告では出土遺物により時期が明確な遺構を中心に報告する事とし、以下各時代を追って述べる。



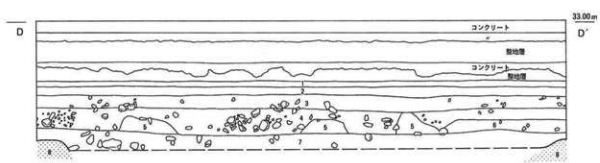
1．現代耕土　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト層
2．床土　7.5YR6/8 橙色シルト層
3．中世包含層　10YR6/2 灰黄褐色マンガンブロック全体的に含むシルト層
4．中世包含層　10YR5/4 にぶい黄褐色弱粘質シルト層
5．地山　10YR5/1～5/2 褐灰色～灰黄褐色砂含むシルト層



1．現代耕土　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト層
2．〃　2.5Y3/2 黒褐色シルト層
3．床土　2.5Y5/4 黄褐色シルト層
4．中世包含層　2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト層
5．中世溝埋土　2.5Y5/4 黄褐色シルト層
6．弥生時代包含層　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層
7．弥生溝埋土　2.5Y5/8 黄褐色 弱粘質シルト層
8．地山　10YR5/6 黄褐色 弱粘質シルト層

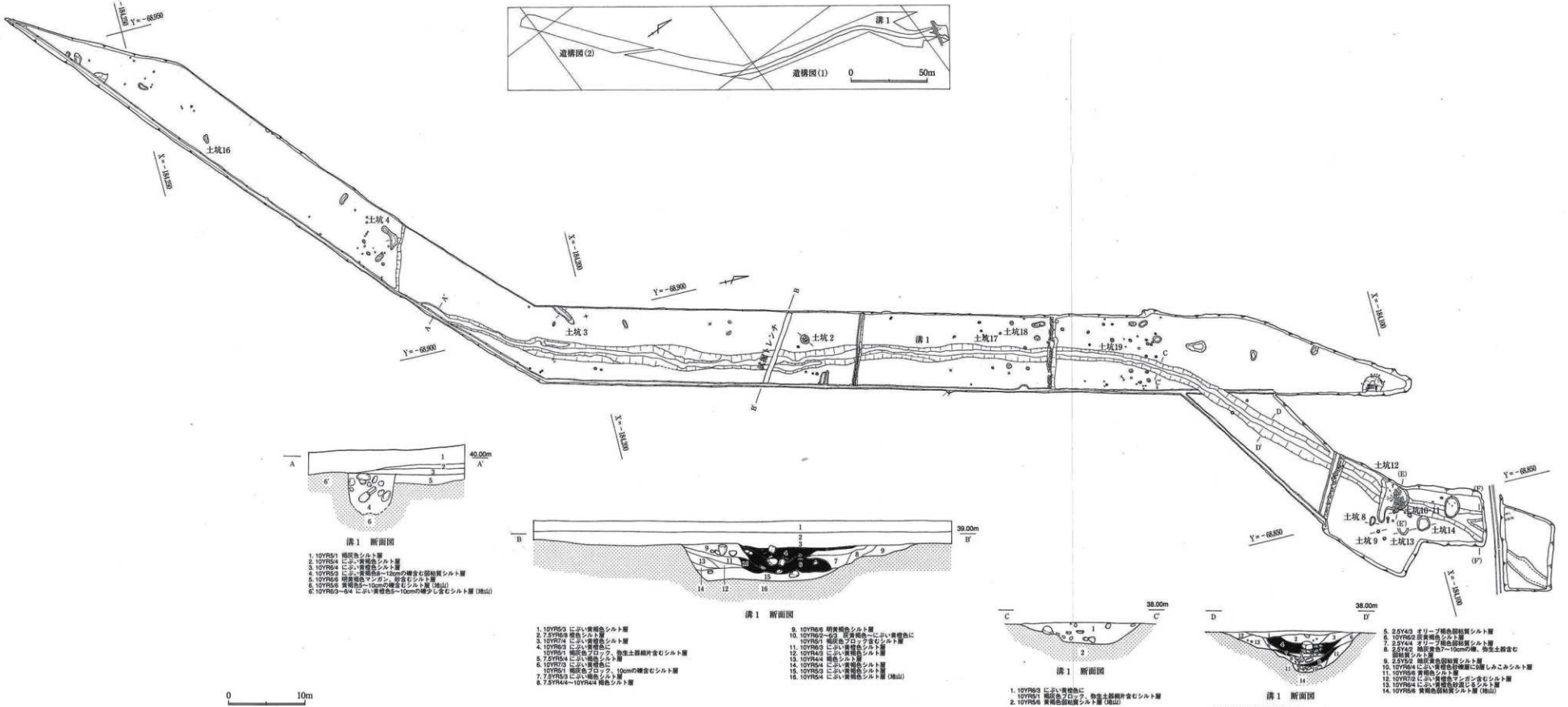


1．現代耕土　2.5Y5/1 黄灰色シルト層
2．床土　10YR6/6 明黄褐色シルト層
3．近世耕土　10YR5/2 灰黄褐色シルト層
4．〃　2.5Y5/3 黄褐色シルト層
5．中世包含層　10YR5/2 灰黄褐色に黒褐色斑点多く混じるシルト層
6．洪水堆積層　10YR5/6 黄褐色弱粘質シルト層
7．〃　10YR5/2 灰黄褐色シルト層
8．〃　2.5Y5/3 黄褐色砂混じるシルト層
9．〃　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト層



1．近世耕土　10YR5/2 灰黄褐色シルト層
2．床土　10YR5/8 黄褐色に10YR6/2灰黄褐色混じるシルト層
3．近世包含層　10YR5/4 にぶい黄褐色に褐色斑点混じるシルト層
4．洪水堆積層　10YR5/8 黄褐色シルト層
5．〃　10YR5/8 黄褐色シルト層
6．〃　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト層
7．〃　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト層
8．地山　10YR5/6 黄褐色粘質シルト層

第３図　井関・亀川遺跡 基本層序



第4図　井関遺跡　遺構図（1）
弥生時代 溝1平・断面図

弥生時代　溝１（第4・5・6図）

弥生時代中期～後期の土器を埋土に包含する溝である。調査区南端から北流し、蛇行しながら除々に東に向きを変えていく。最大幅3.2m、最小幅0.9m、深さは最大0.8m、最も浅い部分で0.2mを測る。溝の最終埋没時期の埋土は、弥生時代後期の遺物を包含する砂礫である。それ以前の溝として機能した段階ではシルト層が堆積しており、包含する遺物は弥生時代中期後半～後期に属するものと考えられる壺等の弥生土器片である。遺物はコンテナに約２箱出土したが、大半は壺や甕の体部片と考えられる磨滅した破片である。接合資料はほとんど無く、遺存状態の悪いものを含め、図化し得る遺物は全て記載した。

中世期の耕作によって、弥生時代の遺構面はかなり削平を受けている。大阪湾に向けたなだらかな傾斜面を北流するように開削された溝は、段丘先端でやや東に屈曲し段丘崖下で二股に分岐するが、その下流側では僅かに痕跡を確認し得るのみである。さらに一段低い段の水田面で確認トレンチを設定したが、現代耕作土と床土直下で堅緻な礫層に至り、溝の痕跡は認められなかった。残存する溝の北端と判断されたため、範囲を拡張しての溝の検出を断念し調査を終了した。

出土遺物は砂礫に混じって出土したためかなり磨滅を受けており、土器の器壁表面は剥離が著しく遺存状態は極めて悪い。第三層より検出された遺物は弥生土器の壺・甕・高坏、石器としては石鏃と不明石製品がある（第5・6図）。

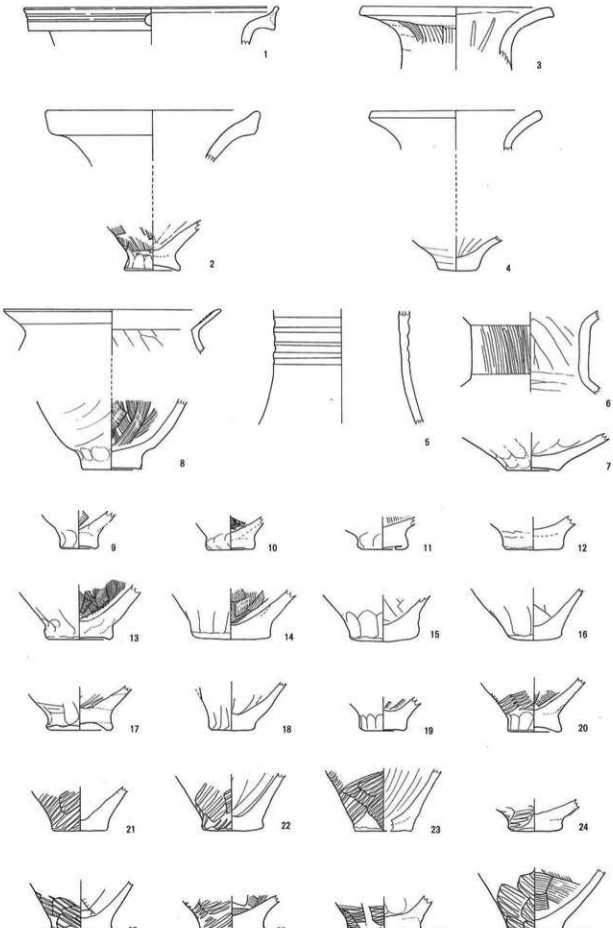
１～７と29は広口壺である。１は中期後半の広口壺口縁で、口径18.6cmを測り、口縁端部を上下に拡張し外面に浅い凹線を巡らす。２～７は後期の広口壺である。２は垂下する口縁を有する壺である。胎土は軟質で磨耗が著しい。３と４は頸部が立ち上がり、やや厚みをもったまま外反する口縁を有する。丁寧なミガキの痕跡が認められる。５は凹線を巡らす頸部である。６と７は球形の体部をもつ広口壺の頸部と底部である。出土地点や胎土と調整から、おそらく同一個体と考えられる。外面は丁寧な縦方向ミガキ、内面は縦方向のミガキとナデを施す。29は口縁を拡張した二重口縁壺で二段に刻み目を巡らす。大型鉢の可能性も考えられるが、類似例等から、白色胎土と中期中葉に出現する刻み目をもつ二重口縁壺の系譜を引く紀州系の遺物と考えられる。

８は、くの字状に外反した口縁に丸みを帯びた体部を呈する中型の甕である。外面にタタキは認められず、粗いナデ調整で仕上げ、内面は丁寧な縦方向のハケ調整を施す。

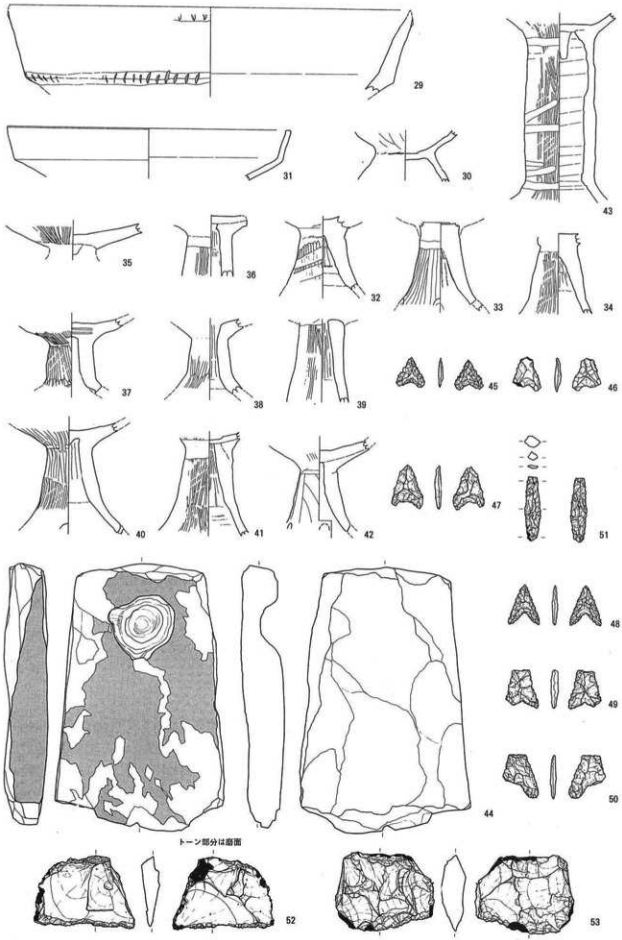
９～28は底部である。９～19までは外面にタタキのない底部、20以降は外面にタタキを有する甕の底部である。底部の形態では上げ底と平底に、内面はハケ調整か縦方向のナデ調整かに区別できるが、器種を断定するには至らない。やや小さめの直径で上げ底の底部をもち、外面に指頭圧痕を残し、体部へ向って内湾しながら開く９～11等は鉢の可能性も考えられる。概ね弥生時代後期の所産に属する壺・甕・鉢いずれかの底部としておきたい。

30は台付き鉢或いは高坏である。杯部が椀形を呈するものと思われる。

31～43は高坏である。31は杯部が比較的浅く僅かに外湾する高坏である。遺存状態が悪く調整は不明である。43は長脚で屈曲する口縁をもつ高坏の脚柱部である。外面は丁寧な縦方向のミガキが施され、最後に横方向のナデを行っている。内部は成形のままの轆轤跡が明瞭に残されている。杯部との接合部分には円盤充填技法がみられ、杯部の中心には焼歪みを補正するために支柱を入れる突起部が残る。32～42は小型でやや裾の広がる高坏である。杯部と脚部の接合部分から、円盤充填技法の有無が区別される。35～42は円盤充填技法が認められ杯部の中央が薄く、接合部分で剥離が認められる。脚部が長脚化



第5図　弥生時代 溝1 出土遺物（1）



第６図　弥生時代 溝１ 出土遺物（２）

しているためか、外面は数段階に分けた縦方向のミガキが全面に認められる。内面は絞りの痕跡が認められる。32～34は小型の高坏で、杯部と脚部の接合部分が厚く一体化する高坏である。いずれも外面は丁寧な縦方向のミガキ、内面は絞り痕が残る。色調が灰白色のものは30、浅い黄橙色のものは31・32・34～41、明るい橙色は33・42・43である。杯部が遺存しないため詳細は不明であるが、概ね後期の所産としておきたい。

また、溝１の北東端部において検出された部分は、中世期のある一時にも溝として機能していたことが判明した。出土遺物は64・65の小皿である。

石器類としては、溝埋土から石鏃などが出土している（44～47）。44は緑泥片岩の不明石製品である。最大長14.0㎝、上端幅6.8㎝、下端幅残存8.9㎝、最大厚2.2㎝を測り、他の未製品の転用材と考えられ、中世遺物の混入の可能性もある。表面と側面１面を研磨に使用している。45～47はサヌカイトの石鏃である。いずれも欠損が認められ廃棄されたものと考えられる。

その他、弥生時代の溝付近の地山直上面から石器が検出されており、併せて報告する。48～50は石鏃、51は石錐、52と53はスクレイパーである。

弥生時代　土坑２・３・４（第４・７図）

弥生時代の溝が検出された地山面上で、弥生時代と考えられる遺物を埋土に包含する土坑を３基検出した。

土坑２は、南北1.1ｍ、東西1.3ｍ、深さ0.4ｍを測る円形の土坑である。最下層には砂礫の堆積が認められた。

土坑３は、最大幅推定3.8ｍ、最小幅0.8ｍ、深さ0.6ｍを測る不定形土坑である。

土坑４は、最大幅3.2ｍ、最小幅0.6ｍ、深さ0.4ｍを測る不定形土坑である。

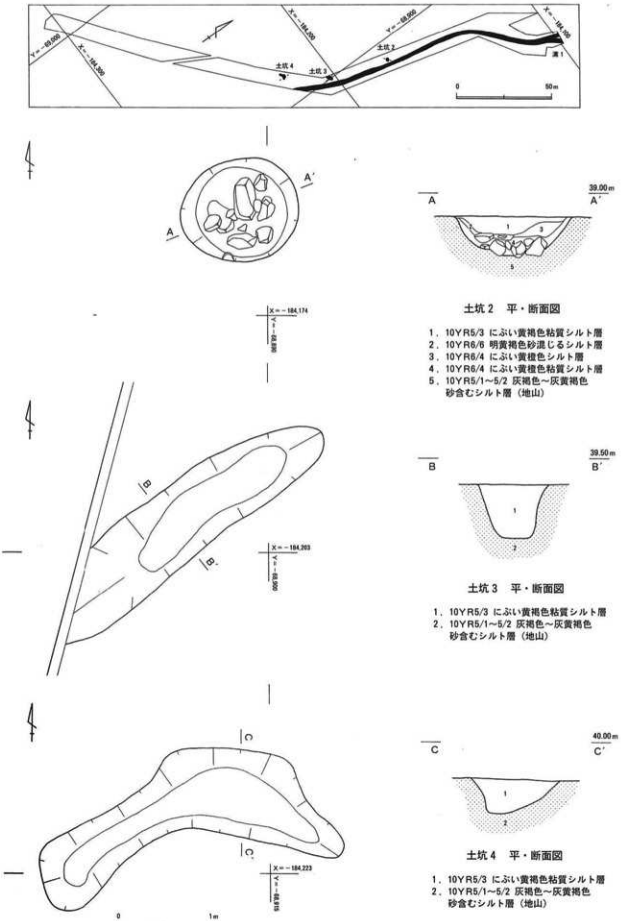
いずれの土坑から検出された土器も器壁の剥離が著しく、壷らしい丸い膨らみをもった軟質で橙色を呈した体部と思われる破片を確認し得るのみであり、器種や器形の特定は困難な状態である。埋土は溝１と同色同質のにぶい黄褐色シルト層である。こうした状況から埋没時期は弥生時代後期と推定されるが、遺構の性格は不明である。本調査が溝を主眼とした調査しかなされず、溝の性格や遺跡全体の中での位置づけも充分なし得ない状況において、溝の西側にこうした土坑などの弥生時代の遺構が広がる可能性が充分想定されることを指摘しておくことで、本遺構の報告に代えたい。

奈良時代　溝５（第８図）

調査区南端の地山直上面で検出された奈良時代の溝である。調査区を横断する形で南北方向に走行し、幅1.5ｍを測る。中世耕作面の著しい削平を受け、溝の埋土は0.2ｍと非常に浅く、にぶい黄褐色の弱粘質シルト層１層である。遺物は、埋土より須恵器壺の口縁１点（54）が検出された。付近に奈良時代の遺構は検出されず、周辺地域においても奈良時代に属する遺跡の存在も知られておらず、本時代の遺構の性格や広がりに関する詳細は全く不明である。

鎌倉時代以降　土坑６・７・８・９・10・11・12・13・14・16（第４・８・９図）

調査区南半分の西端部と最北端で検出された土坑である。西端部では、小土坑・ピット群で構成される鎌倉時代以降の遺構が検出された。埋土はいずれも１層でにぶい黄褐色シルト層である。性格は不明



土坑2　平・断面図

1．10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト層
2．10YR6/6 明黄褐色砂混じるシルト層
3．10YR6/4 にぶい黄橙色シルト層
4．10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト層
5．10YR5/1～5/2 灰褐色～灰黄褐色
　砂含むシルト層（地山）

土坑3　平・断面図

1．10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト層
2．10YR5/1～5/2 灰褐色～灰黄褐色
　砂含むシルト層（地山）

土坑4　平・断面図

1．10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト層
2．10YR5/1～5/2 灰褐色～灰黄褐色
　砂含むシルト層（地山）

第7図　弥生時代 土坑2・3・4 平・断面図

である。遺物の出土も希薄である。（第８図）

土坑６は南北0.6ｍ、東西0.7ｍ、深さ0.8ｍを測る円形の土坑である。埋土内より瓦器１点（55）が出土した。口径約12.0㎝、高台は遺存しない。口縁が外反し外面指押さえ、内面に平行暗文を施す。器高の浅い14世紀代の和泉タイプの瓦器椀である。

土坑７は第４図遺構図（２）に示す調査区の東端で１基だけ単独で検出された土坑である。遺構が検出された周辺の地山は礫層で、土坑の最深部のみが遺存したものと判断される。南北1.1ｍ、東西0.6ｍを測る楕円形の土坑である。深さ0.3ｍ、埋土は灰黄褐色シルト層である。遺物は湊焼きの甕片が数点出土した。56は口径29.0㎝を測り、口縁端部は厚く立ち上がりつつ、やや外湾し、横ナデを施す。体部はタタキ技法、内面は横方向のハケメ調整である。14世紀の埋甕と考えられる。

調査区最北端に当たる畦畔と畦畔の間の平坦面の一部で同時期の土坑が検出された。性格は不明である。（第９図）

土坑８は、東西1.2ｍ、南北0.7ｍを測る不定形の土坑である。埋土は浅くにぶい黄橙色シルト層で、遺物は検出されなかった。

土坑９は、直径0.4ｍ、深さ0.3ｍを測る円形の土坑である。埋土は５㎝以下の礫含む黄褐色シルト層で、遺物は検出されなかった。

土坑10は、東西0.4ｍ、南北0.3ｍ、深さ0.2ｍを測るほぼ円形の土坑である。埋土はにぶい黄橙色シルト層で、遺物の出土は皆無である。

土坑11は、東西0.6ｍ、南北0.5ｍ、深さ0.3ｍを測るほぼ円形の土坑である。埋土は５㎝以下の礫含むにぶい黄橙色シルト層で、遺物は検出されなかった。

土坑12は、東西5.7ｍ、南北3.5ｍ、深さ0.4～0.6ｍを測る不定形土坑である。埋土は礫と５㎝以下の礫含むオリーブ褐色シルト層である。砂礫層から瓦質の椀と皿、土師質の羽釜が出土している。58は口径8.2㎝、器高1.5㎝を測る瓦質の皿である。59は口径13.0㎝、残存高2.4㎝を測る瓦器椀である。磨耗が著しいが平行暗文の痕跡が認められる。60は口径27.0㎝、残存高13.0㎝を測る土師質羽釜である。胎土は暗茶褐色で全体に砂が混じっており、口縁の内湾と鍔の形態から紀州系遺物と考えられる。

土坑13は、東西1.6ｍ、南北1.4ｍ、深さ0.5ｍを測るやや大型の円形の土坑である。埋土はにぶい黄橙色シルト層である。遺物は土師質の皿（61）が１点出土しており、口径13.7㎝、器高2.9㎝を測る。

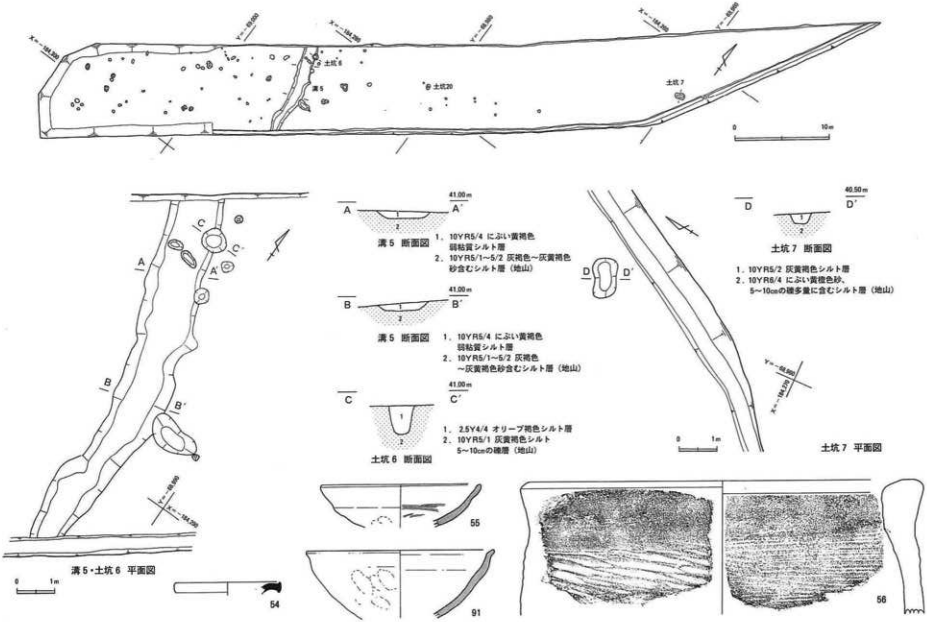
土坑14は、東西1.7ｍ、南北1.5ｍ、深さ0.2ｍを測るやや大型の円形の土坑である。埋土はにぶい黄橙色シルト層である。遺物は土師質の皿と瓦器椀が各１点出土している。62の土師質の皿は口径5.8㎝、器高1.4㎝を測る。63の瓦器椀は口径13.1㎝、残存高2.0㎝を測る。外面、内面共に平行暗文を施す。

土坑16（試掘トレンチ）は、東西0.6ｍ、南北0.3ｍを測る焼土坑である。遺物は瓦器椀（91）が出土した。土坑７・20と同じ様相を呈していることから併せて報告する。

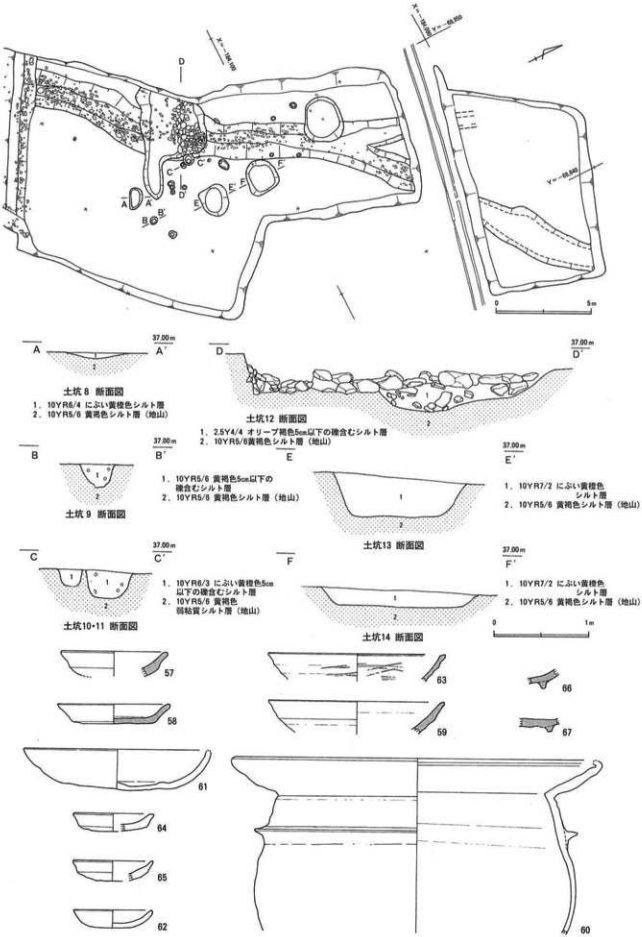
江戸時代以降　石積み遺構15（第10図）

調査前の現況で調査区中央付近に性格不明の人為的高まりが存在した。東西17.5ｍ、南北44.5ｍを測る平面長方形をなすが、中央に窪みを有し、一見、前方後方墳のような形状を呈する。

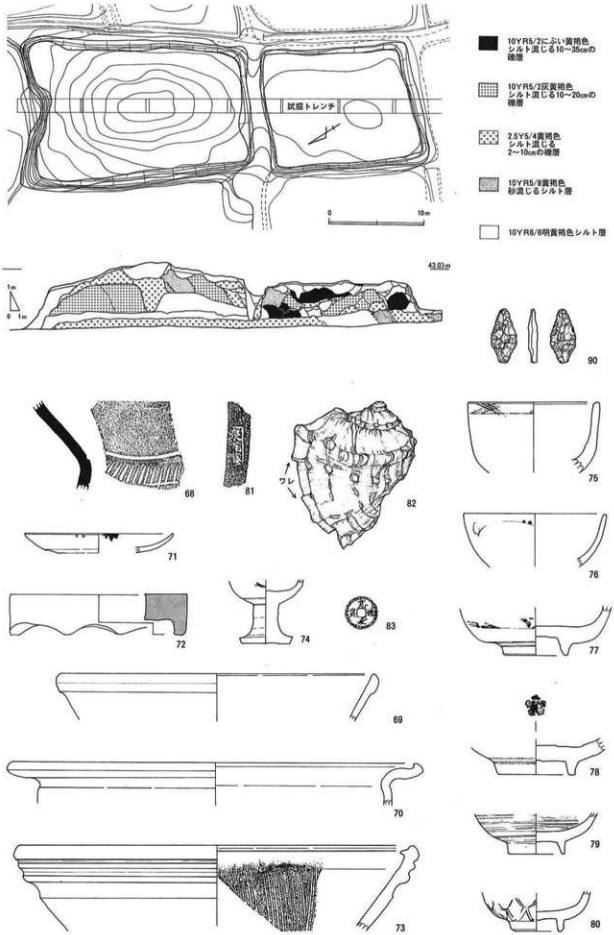
平面の測量後、長軸方向に幅２ｍのトレンチを設定し、その構造と性格の解明を試みた。その結果、表土除去後、大小の礫層の堆積が確認され、近世陶磁器や窯道具などの出土が認められたため、古墳や居館などの構築物でないことが確認された。当初最頂部に祠があったとの言い伝え等から集落内の祭祀



第８図　井関遺跡遺構図（２）
奈良時代 溝５、鎌倉時代以降 土坑６・７・16（試掘トレンチ）平・断面図 出土遺物



第９図　鎌倉時代以降 溝１、土坑８・９・10・11・12・13・14 平・断面図 出土遺物



第10図　江戸時代以降 石積み遺構15 平・断面図 出土遺物

遺構の可能性も高いと考えていたが、周辺は土留のための石が貼り付けられており、版築の可能性も無いことより、形成状態の確認のため、長軸方向に重機で断割りを行い断面観察を行った。その結果、シルトや大小の砂礫を小山のように盛り上げる事を数十回繰り返している事が確認された。

出土遺物は各層の上下間で時期差は認められず、主に砂礫の中に混入したと思われる状態で混在している。上層部分には江戸時代以降の陶磁器・窯道具と瓦片・銭・時代不明のアカニシ貝の蜻壷等がコンテナで15箱ほど砂礫の中に混入していた。やや時代の遡る須恵器短頸壺（68）や白磁（69）、鍋（70）の口縁部は南方部の下層小礫層の中から出土している。

最下層で基壇状に見えるシルト層は、周辺の近世耕作土層を検出したレベルと同じで、かつ含まれる遺物も近世後半の陶磁器の碗（78～80）である。従って現在の形状になるまで、盛り上げる期間は長期に渡っており、各盛土の最上層に有機物が腐食したような黒色土の帯状の堆積があり、次の盛土がされるまでには一定の期間が空いていたことが窺われる。

最終的には約３ｍにも積み上げられた砂礫層に明確な用途や構造が認められず、江戸時代以降の耕作に伴う不要な洪水堆積物等が徐々に集積された結果形成された高まりであると判断された。写真図版扉掲載の航空撮影写真には、この石積み遺構の東側の水路から丘陵裾となっており、上層の瓦や窯道具などはその斜面での堆積かと推定される。

特筆すべき点として、全調査区から１点も確認されなかった古墳時代の須恵器（68）が出土している点である。井関川上流には阪南市最古の集落との伝承が残る桑畑村の集落があり、さらに遡る時期の集落の存在も想定される。また本石積み遺構から「泉瓦？」の銘を持つ平瓦（81）が出土している。瓦と共に窯道具（72・87）や窯体片（89）等も併せて出土している事から、泉州地方で一時期活気を帯び、和歌山城等に納めた瓦産業に関連する遺構の存在もこの地に窺われる。

３．小結

弥生時代では、弥生時代中期～後期の土器が出土する溝１条が検出された。地形の傾斜方向に向って走行することや、蛇行すること等からみて、人為的に開削された溝というよりは自然流路的な様相が強く認められるが、旧井関川と考えるにはあまりにも小溝である。今回の調査結果からのみでは、溝の西側に集落が存在する可能性を示唆するにとどまり、祭祀的行為の後土器等を廃棄したり、周辺水田への水の取り入れなどの機能を想定することも困難である。砂礫層の中に包含されている遺物の出土に関しても、出土位置、器種や時期差に規則性がなく、土器・石器ともに完形は１点も含まれないことや、器種の多様性の無さ等から、廃棄された遺物と考える方が妥当かと判断される。

奈良時代については、南北方向の小溝１条を検出したのみで、井関遺跡周辺に奈良時代の散布地はおろか同時代の遺跡の存在も明らかではなく、この時期の人々の生活との関連などを明らかにするには至っていない。

室町時代以前には東西方向に向けて、帯状の砂礫の堆積が認められる。面的に捉えることが出来るような明確な遺構ではなく、砂礫が蛇行しながら地形の形状に沿った形で堆積していることが分かる。河川の増水というよりおそらく井関川が現在の位置に形成されるまで、丘陵部を小流路が幾筋も蛇行しつつ流れた形跡と考えられる。

江戸時代に至ると集落は亀川遺跡の位置する北側に移り、井関遺跡は当時耕地化された生産地域であったことが窺われる。河川の増水など度重なる自然災害によって、耕作土層の上に砂礫層が堆積すると一

カ所に集めて積み重ねていたようである。石積み遺構のある周辺は現在も共有地のような扱いとなっており、村落内に何らかの取り決めがあったことが推測される。

第三節　亀川遺跡調査結果

1．遺跡の概略

当該地は記録に残る大災害となった昭和27年の鳥取池の決壊により一度完全に水没した地域である。この際の砂礫層は調査区全体を覆っており、かつて行われた分布調査や小面積の試掘調査では遺構面を確認するには至らず、これまで明確な遺構・遺物は確認されていなかった地域である。また、今回の調査に先立つ試掘調査においては、これ以外にも数次に渡る河川の氾濫による砂礫層の堆積が確認されている。弥生時代以前に遡るものや、鎌倉時代から江戸時代後期の各時代の遺物を包含する砂礫層である。もとより狭小な平地部分は、度重なる水害によって削平され、厚く堆積した砂礫層によって現地表が覆われ、自然条件に左右されつつ部分的に遺存する状況を示す。

今回の発掘調査で検出された遺構は、井関遺跡と同様３時期の遺構に大別される。地山面直上で弥生時代の溝や、鎌倉時代以降の掘立柱建物群や土坑・焼土坑等が検出された他、調査区全域に室町時代の水田と考えられる耕作土層が検出され、調査区南東部全域では洪水によって一瞬にして埋没したとみられる井戸群等が検出された。（第11図）

2．基本層序

調査区は、丘陵と丘陵に挟まれた平野部の開口部分に位置し、北方向に傾斜する地形に加え、井関川が蛇行するために形成された地形により各面の土層堆積は異なった様相を呈し、複雑な堆積状況を示している。

第一層は現代耕土および床土である。第二層は灰黄褐色に黒褐色斑点多く混じるシルト層の中世包含層である。第二層は比較的緩やかな勾配の傾斜を示す調査区西半で分離して検出され、第二層直下で室町と弥生時代の遺構が検出される。第二層下は地山層である。第二層は調査区の水路を挟んで西ではほぼ全域に薄く堆積するが、南端では検出されず、第一層直下で地山層となり江戸時代以降の井戸が検出される。

また調査区中央付近の現代水路を挟んで東西で大きく地形の様相が異なっている。西側は傾斜がきつく中・近世の砂礫層によって遺構面が埋没している。東側は高台となっており、近世の砂礫層の直下に江戸時代後期の屋敷跡に伴う井戸が検出された。

遺存状態に差はあるものの、基本的な層序は井関遺跡とほぼ同様の状況を示し、大きく３時期として捉えることができる。（第３図下）

3．遺構と遺物

近世の砂礫層と中世の耕作面を掘削すると、古代～近世の各時代の遺構が同一面上で検出される。以下、出土遺物により時期が明確な遺構を中心に報告する。

弥生時代　溝１（第11・12図）

調査区を斜めに横切る形で検出された溝である。東西に蛇行しながら、ほぼ真北に向って走行する。谷筋に沿って走行するため、近世に再度上部が一時期溝状に機能していたことも窺われる。検出長60.0m、最大幅3.7m、最小幅1.4m、深さは0.3～0.5mを測る。

遺物は南東の中州状になった溜まりで石器と、最も傾斜角度のある中央部付近の底部で弥生土器が検出されている。１は後期の広口壷の口縁である。口径15.7cmを測り口縁端部を垂下させる。２は中期の広口壷の口縁である。口径19.2cmを測り口縁端部は上下に肥厚し、外面は凹線文と貼り付け浮文、内面は櫛描列点文で加飾する。３～８は後期の壷と甕の底部である。外面にタタキのあるものと無いものに大別出来る。９は高坏である。10はサヌカイト製のスクレイパーで2.7cm×3.5cmを測る。11はサヌカイト製の有舌尖頭器である。先端部を欠損している。２の広口壷を前様式の流れをくむものと考えれば、本遺構の出土遺物は、概ね後期に機能していた溝に廃棄された遺物群と判断される。

弥生時代　溝２（第11・12図）

調査区の西側で検出された小溝である。北東方向に流れており、溝というより自然流路の名残りのような検出状況を示す。最小幅0.5m、最大幅でも1.4mと細く、埋土もにぶい黄橙色シルト層で中世期に上部が削平されたことが窺われる。

12は弥生時代後期の広口壷口縁で、直径19.2cm、口縁端部を垂下させ外面を凹線で加飾する。13はサヌカイト製のスクレイパーで、2.2cm×2.9cmを測る。

弥生時代　土坑３（第11・13図）

調査区南部で単独して検出された不定形土坑である。最深部での深さは約0.9mを測り、堆積状況から徐々に埋没したことが窺われる。肩部１・２層のシルト層から弥生土器が検出されており、当該時期に廃棄されたものと考えられる。

最終埋没時期は、出土遺物から弥生時代中期と考えられるが、遺構の性格は不明である。

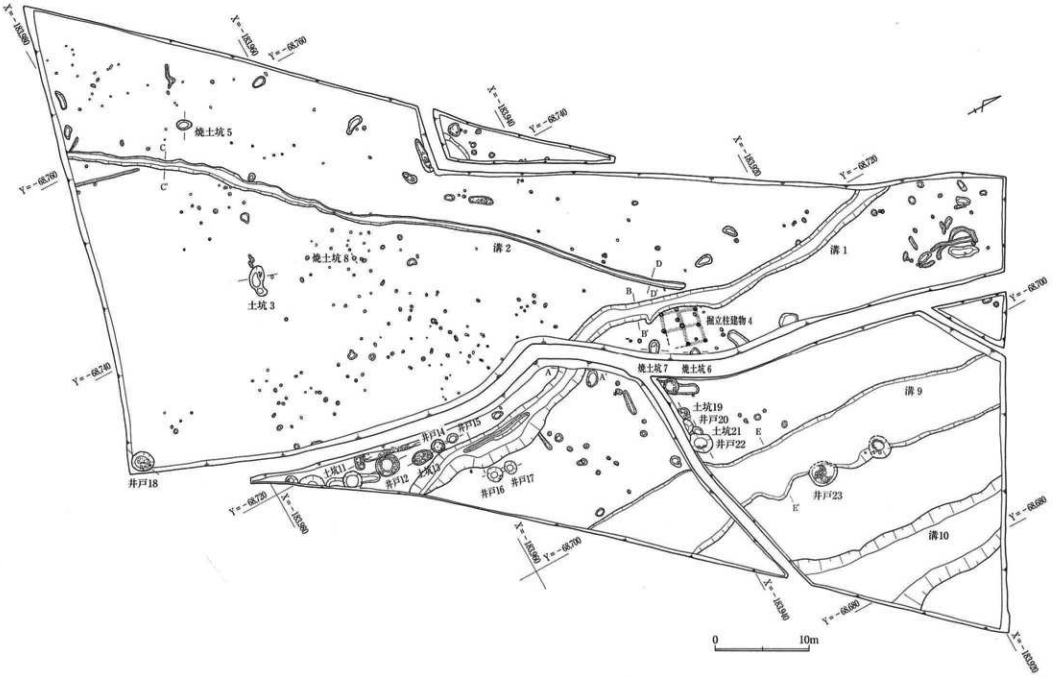
17～19は広口壷である。17は口縁端部を拡張し、４条の凹線を巡らし貼り付け浮文を施す。口縁内面は櫛描列点文を施す。18は広口壷の頸部である。外面は丁寧な縦方向の櫛描沈線の上に、横方向の直線と波線を交互に施す。内面は縦方向の丁寧なヘラミガキが認められる。19は口縁の端部を垂下させ、浅い凹線を巡らす広口壷の口縁部で、直接接合しないものの同一個体と考えられる底部も出土している。

20は口縁を上方に肥厚させた甕である。外面は櫛描文を巡らすのみで、加飾性がやや退化した様相を示す。胎土の色が灰黄褐色（10YR6/2）で紀伊系搬入品の可能性も考えられる。21の甕は外面に横方向の調整を施し、胎土や全体の器形から20同様紀伊系搬入品の可能性が高い。

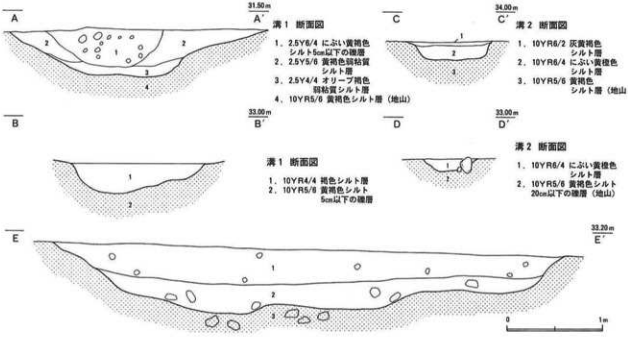
22と23は大型の鉢である。22は口縁に貼り付けによる段を有し外面を丁寧な横方向ミガキで調整する。23は口縁部を内湾させ、外面は凹線で加飾し鉢の体部には縦方向のハケメが認められる。

鎌倉時代以降掘立柱建物４（第11・14図）

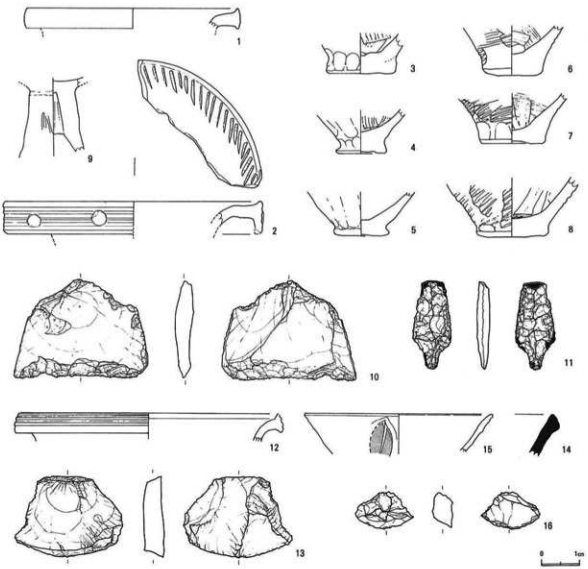
調査区の中央で検出された小ピット群から唯一復元し得る掘立柱建物である。建物を構成するピットは、掘方が長径36～49cm、短径32～41cmを測るやや楕円形を呈し、柱根部分は直径20～25cmを測る。東西２間分、南北２間分を検出したが、現代水路により攪乱を受ける他調査区外の東側に向けさらに延び



第11図　亀川遺跡　遺構図



溝9 断面図　1、7.5YR6/4 にぶい橙色シルト5～10cmの礫層　2、7.5YR7/4 にぶい橙色シルト10～30cmの礫層　3、10YR7/8黄橙色シルト層（地山）



第12図　弥生時代 溝1・2、鎌倉時代以降 溝9 断面図 出土遺物

る可能性も残される。ピット間は約1.9mを測り、建物の主軸はほぼ北方向を示す。各ピットに伴う遺物は検出されなかったが、上部の包含層の遺物から室町時代以前の建物と判断される。

鎌倉時代以降　小ピット群（第11図）

掘立柱建物4を構成するピット以外にも、調査区の西半部では小ピットがややまとまって検出されている。掘立柱建物4を除いては明確な建物を特定するには至っていない。検出されたピットの埋土は黄褐色シルト層である。ピットの埋土より土師器や瓦器の細片が検出されているが、実測可能な遺物は皆無である。上部の包含層の状況から、14世紀代に周辺が耕地化することに伴い整地されて、全て埋没したものと考えられる。

鎌倉時代以降　焼土坑5・6・7・8（第11・14図）

上記の中世期のピット群中で不定形土坑が4基検出されている。建物との前後関係や性格など不明な点は多いが、ピット群と同一面で検出されている。いずれも焼土を伴い焼けた状況を示す。出土遺物を伴うのは焼土坑5のみで、他の焼土坑から遺物は全く検出されなかった。

焼土坑5は東西0.9m、南北1.5m、深さは僅かに16cmを測る楕円形の土坑である。最下層より瓦器椀高台片（25）が1点検出された。25は高台径4.9cm、残存器高3.0cmを測る。外面全体に指押さえ、内面は平行暗文の和泉タイプの13世紀後半の瓦器である。

焼土坑6は東西0.7m以上、南北1.0m、深さは僅かに8cm遺存するのみである。

焼土坑7は東西1.3m以上、南北0.9m、深さ0.1mを測る。

焼土坑8は東西南北約0.4m、深さは僅かに18cm遺存するのみである。

鎌倉時代以降　包含層出土遺物（第14図）

24は瓦器椀の高台である。扁平化が進んでおりわずかな貼り付け高台から、14世紀の瓦器と考えられる。26は土師質皿で、27は瓦質皿である。27は暗文も明瞭で13世紀代の所産と考えられる。28は須恵質で東播系の鉢と考えられる。29は13世紀代の青磁蓮弁文碗の破片、30と31は12～13世紀代の白磁碗片である。

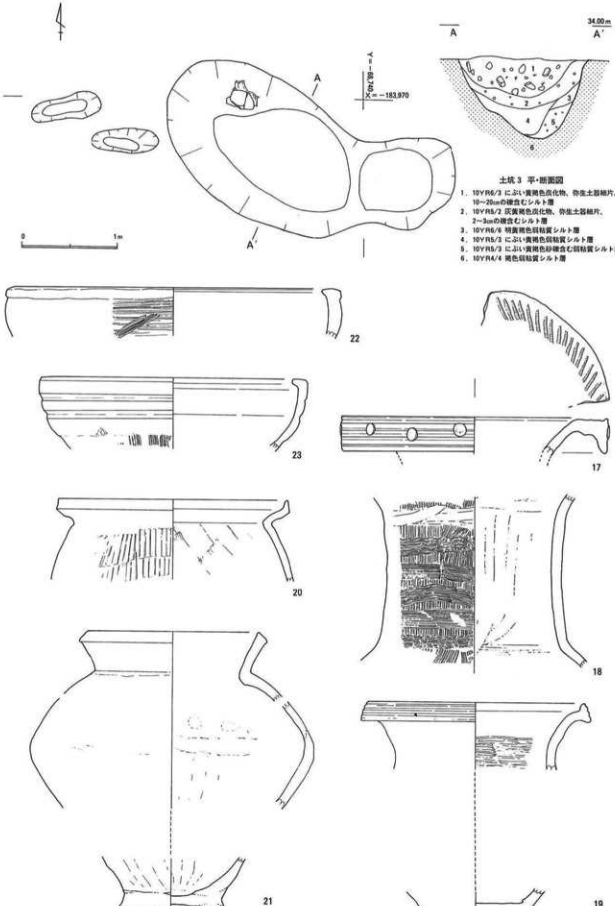
鎌倉時代以降　溝9・10（第11・12図）

調査区東端の中世耕作土直下で検出された、平行して北流する2条の大溝である。溝9は最小幅4.5m、最大幅8.2m、溝10は最小幅7.0m、最大幅8.8mを測る。埋土はいずれも上層が多量の小礫層、下層が拳大の礫層で、シルト質の地山を抉るように堆積する。この時期の増水による多量の土石流で埋没したものと考えられる。溝9の上層から若干の遺物が出土している。

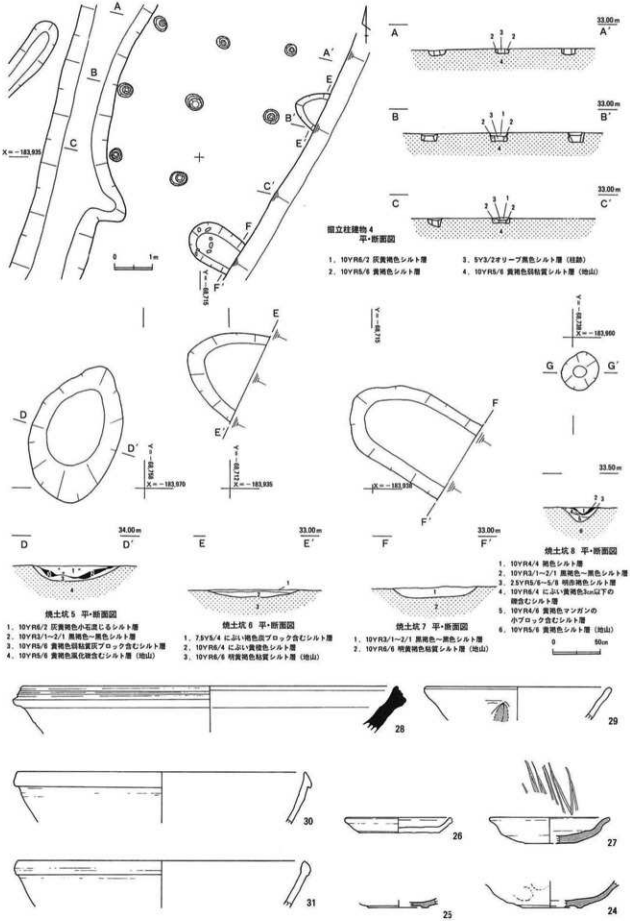
14は東播系擂り鉢片、15は青磁碗片、16はチャート製の火打ち石である。遺物は上流からの流れ込みと判断されるもので、直接本溝の時代を決定し得る遺物とは考えられないが、中世耕土が全面に薄くのっていることより少なくとも室町時代以前に機能した溝と考えられる。

江戸時代以降の遺構（井戸・土坑11～22）と遺物（第11・15・16・17図）

調査区東半で江戸時代の石組み井戸と井戸状の土坑数基が検出された。石組みで井側を築くものは確



第13図　弥生時代 土坑 3 平・断面図 出土遺物



第14図　鎌倉時代以降 掘立柱建物4、焼土坑5・6・7・8 平・断面図 焼土坑5、包含層 出土遺物

実に井戸と認識されるが、それ以外の土坑については明確に井戸と判断する根拠に乏しいが、水脈に当たっているため最深部での湧水が著しく、畑地等に伴う素掘りの井戸の機能が想定される。各井戸および井戸状の土坑には一定の時期差が想定されるが、出土遺物に乏しく同一面で検出されることから構築時期等には不明な点も多い。各遺構ごとに個別に述べる。

土坑11は隅丸長方形の土坑で、東西1.5m、南北0.9m、深さ0.1mを測る。上部の大半が削平を受け、土坑最深部の礫のみが検出された。遺物は皆無である。

井戸12は加工した砂岩の石組みの井側構造をもつ円形の井戸で、掘方は東西2.1m、南北2.5m、検出深度は1.2mを測る。現在も湧水が認められた。断割りを行い土層の確認を行ったが、出土遺物は認められなかった。

土坑13は東西1.3m、南北2.2m、深さ僅か5㎝を遺存する隅丸長方形の土坑である。土坑11の検出状況と類似し最深部の礫を遺存するのみで出土遺物も皆無である。

井戸14は掘方の直径1.4m、深さ0.6mを測る円形素掘りの井戸である。シルト質の地山を掘削しており、底部では現在も湧水が著しい。

井戸15は東西1.0m、南北1.2m、深さ僅か7㎝を遺存する円形素掘りの井戸である。出土遺物は皆無である。

井戸16は掘方の直径約1.7m、深さ0.8mを測る円形の井戸である。径5～20㎝程度の河原石が崩落した状況が窺われ、構築時には石組み構造の井側であったと考えられる。出土遺物は認められなかった。

井戸17は東西1.4m、南北1.3m、深さ0.4mを測る円形素掘りの井戸である。出土遺物は皆無である。

井戸18は調査区南端で検出された円形素掘りの井戸である。掘方の直径は2.1m、深さ0.6mを測る。埋土には河原石と小石が多数含まれ、裏込めに小石を用いた石組みの井側構造であったものと考えられる。底部では現在も湧水が著しい。出土遺物は近世陶磁器5点が検出された。32は外面に松文、内面は圏線と菱花文を口縁にあしらう染付け碗である。33は外内面ともに刷毛目文様が施される唐津碗である。34と36は伊万里碗である。また、37は鉄釉の蓋で、土瓶の蓋と考えられ、19世紀代の所産と考えられる。

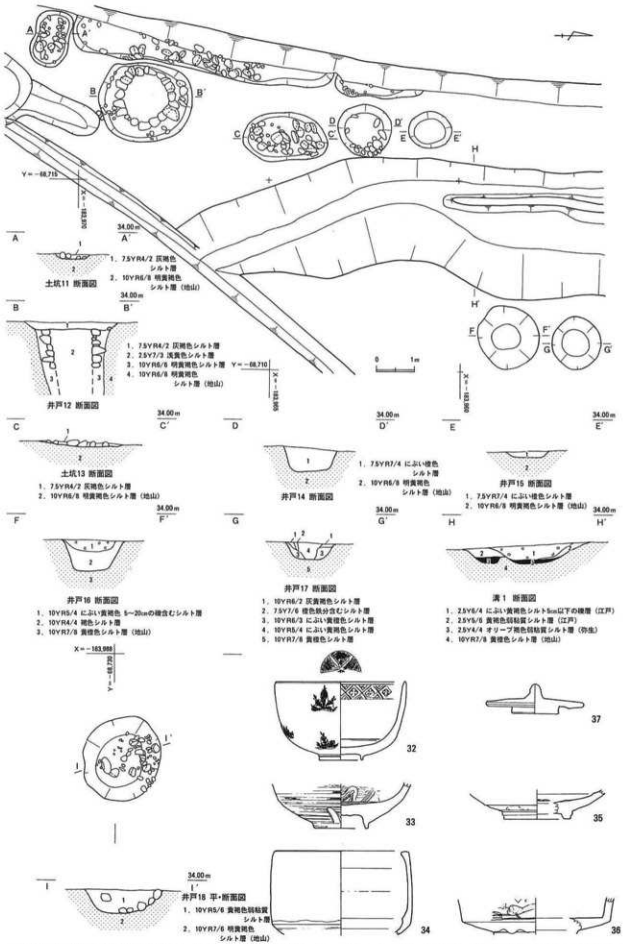
土坑19、井戸20、土坑21、井戸22は調査区中央部東側で連なって検出された井戸群である。いずれも近世～現代の砂礫層によって埋没しているため、近世以前に構築・機能したものと判断されるが、詳細な時期等については明確にし得ていない。構築順は土坑21→土坑19・井戸20→井戸22である。

土坑19は東西1.3m、南北推定1.4m、深さ0.3mを測る楕円形の土坑である。

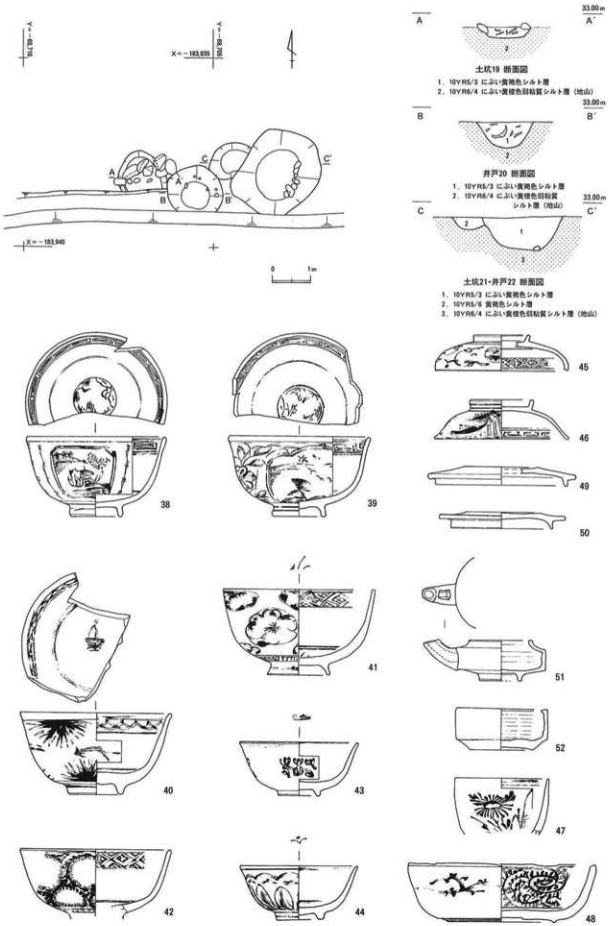
井戸20は東西1.5m、南北推定1.4m、深さ0.7mを測る円形素掘りの井戸である。

土坑19・井戸20には近世陶磁器（38～65）が同時に一括廃棄された状況が窺われ、各遺構間でも接合資料が認められる。

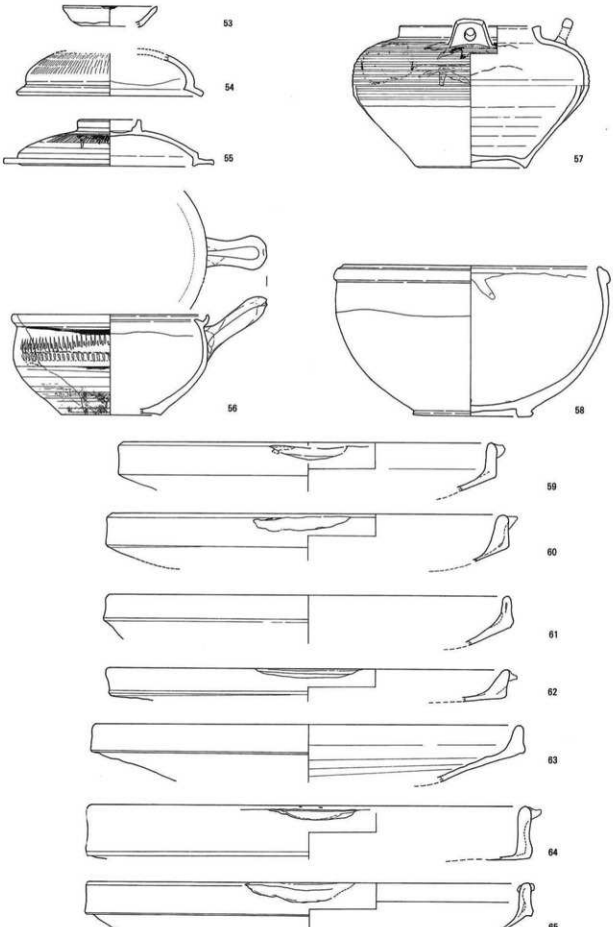
38～44は手描き染付け碗である。38と39は外面を風景文、内面見込みには松竹梅や草花と圏線、雷文を施す。40は外面が草花文、内面が圏線と網目である。41は外面花文、内面には圏線と菱花文である。42は外面に簡略化した蛸唐草文、内面は41と同様圏線と菱花文である。43と44は小型碗である。43は外面不明文、44は花文である。45と46は染付け蓋である。飯茶碗用の蓋で、45は外面扇文、内面に圏線と菱花文。46は外面花文、内面雷文である。47は染付け小型碗である。口径と腰部からの直線的な立ち上



第15図　江戸時代以降 溝1、土坑11・13、井戸12・14・15・16・17・18 平・断面図 井戸18 出土遺物



第16図　江戸時代以降 土坑19・21、井戸20・22 平・断面図 土坑19、井戸20 出土遺物（1）



第17図　江戸時代以降 土坑19、井戸20 出土遺物（2）

がりから湯呑み茶碗と考えられる。48は染付け中皿である。輪花口縁を呈し高台には蛇の目釉剥が認められる。外面は笹文様、内面の見込みは圏線に蛸唐草文様である。49～52・58は灰釉陶器である。49・50は餌入れや砂糖壺等の蓋、51は油差し、52は餌猪口である。いずれも灰オリーブ色を呈する陶器である。53は柿釉灯明皿である。小型で轆轤成形を行っており、口縁に煤付着痕が認められる。54～56は行平鍋およびその蓋である。54と55は外面にトビカンナ痕を有し、内面は薄い灰色の釉が施釉される。56は行平鍋で、把手に文様は無く、底部に使用痕の煤の付着痕が認められる。57は土瓶である。球形の体部外面を轆轤削りし把手を貼り付けている。注口部は欠損する。59～66は陶器焙烙である。底部は型作りで薄く、使用時に破損したためか薄い破片は大量に出土したが、底部を復元し得るには至っていない。いずれも外面は煤の付着による使用痕が残る。口径とその形態から焙烙8タイプが確認された。59と60は器高が低く、底部がやや丸みを帯びている。把手に孔は穿たれていない。61は器高が低く屈曲部がやや外反する。把手は不明である。62は器高が浅く底部が水平に近いものである。把手はやや退化気味である。63は底部が擂り鉢型で轆轤跡がある。形態と胎土が他の焙烙と異なるもので、系譜の違う焙烙の可能性が高い。64は大型で器壁も厚く底部が水平に近いものである。把手に孔が穿たれ貫通している。65も大型であるが底部は丸みを持つものである。66は61と同タイプであるが径が大きく、別タイプとした。

消費地では様々な地域の陶磁器が使用されており、江戸中期以降、生産地においては各地方窯が胎土や文様などを模倣し受注生産を行っているため、生産した窯を特定する事には慎重にならざるを得ない。年代的には、器種構成や形態、文様構成から18世紀中頃～19世紀の範疇が考えられる。

土坑21は東西検出長0.8m、南北0.9m、深さ0.3mを測る楕円形の土坑である。出土遺物は皆無である。

井戸22は掘方東西2.1m、南北2.3m、深さ0.9mを測る楕円形の井戸である。出土遺物は皆無である。底部からは現在も湧水が著しい。

小結

弥生時代では中・後期の土坑1基と溝2条を検出した。住居跡や生産関係の遺構・遺物は検出されず、これらの遺構の性格を充分解明するには至っていない。亀川遺跡から西凡そ500mに当たる蓮池の堤防盛土には弥生時代中期の土器が含まれていることが知られており、付近では後期の方形周溝墓が検出されていることから、調査区から西方の一帯で、弥生時代の人々の様々な営みが展開したことが今回の調査からも窺われる。

室町時代では、14世紀前半の建物や土坑の存在が希薄ながらも確認できた。その後、14世紀代に周辺一帯を耕地化したものと考えられる。南東から東西に広がる開析谷を耕地化したことで、ほぼ現在の景観が形成されたことが窺われる。

江戸時代に至ると、周囲の耕地化が進んだことが窺われ、井戸や井戸状の土坑が多数検出されており、昭和27年の水害時（掲載写真）まで続いていたと思われる。

第三章　まとめ

井関・亀川遺跡は、これまで、僅かに近・現代陶磁器の採取が認められる程度の遺物散布地として捉えられているのみであった。

今回の発掘調査によって、当初予想もされなかった弥生時代中・後期の溝・土坑や、鎌倉時代以降の掘立柱建物や土坑などが検出された。弥生時代中期や後期に、当該地に何らかの生活が営まれた後、長い空白期間を挟み、大規模な開発がなされるのは13～14世紀に至ってからの水田開発によるものである。江戸時代以降には規模等に若干の変化は認められるものの、ほぼ現在の位置に集落や寺院は成立している。多数の井戸が検出されたことから周辺に屋敷地が存在していた可能性も高いものと考えられる。

当該地は古くからの伝承も多く、式内社である波太神社は井関遺跡の南1.6kmに当たる桑畑奥の宮にかつて祀られていたことがそれらから知られ、「畑」が「波太」に転じたものとも言われる。奥の宮の伝承地には方形の基壇状の高まりと考えられるものも遺存している。波太神社が現在の位置に移転する以前、この地に何らかの平安時代を中心とする古代の遺構が存在することも充分想定し得るものと思われる。

字名としても「井関」、「追分」、「茶ノ前」、「垣外」、「宮の内」等が残されており、古くから和歌山への峠道に関連する交通の要衝の地であった事が窺われる。天正年間、織田信長は雑賀一揆における泉南進出の際に、現在の波太神社に本陣を構え雑賀攻めに向ったという「信長公記」などの記述もあり、現在も府道自然田鳥取荘停車場線は信長街道と呼ばれている。こうした古代から中世期の古道・街道に関連した事象が、今後、周辺における発掘調査等によって考古学的にも検証される可能性もさらに高まりつつあるものと言える。

菟砥川　昭和27年の洪水による増水（阪南町史より転載）

表1　井関遺跡　出土遺物一覧表

図版番号	器種	出土遺構	年代	図版No.	写真図版No.	備考
1	弥生土器　壺	溝　1	弥生時代中期後半	5	8	
2	弥生土器　壺	溝　1	弥生時代後期	5	—	
3	弥生土器　壺	溝　1	〃	5	8	
4	弥生土器　壺	溝　1	〃	5	8	
5	弥生土器　壺	溝　1	〃	5	8	
6	弥生土器　壺	溝　1	〃	5	8	
7	弥生土器　壺	溝　1	〃	5	9	
8	弥生土器　甕	溝　1	〃	5	8	
9	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	—	
10	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	—	
11	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	9	
12	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	—	
13	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	9	
14	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	9	
15	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	9	
16	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	9	
17	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	—	
18	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	—	
19	弥生土器　底部	溝　1	〃	5	9	
20	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	5	9	タタキ痕
21	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	5	9	〃
22	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	5	—	〃
23	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	5	9	〃
24	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	5	—	〃
25	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	5	—	〃
26	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	5	9	〃
27	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	5	—	〃
28	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	5	9	〃
29	弥生土器　壺	溝　1	〃	6	10	紀州系・二重口縁
30	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	10	
31	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	10	
32	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	—	
33	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	10	
34	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	—	
35	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	10	
36	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	—	
37	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	10	
38	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	—	
39	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	—	
40	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	10	
41	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	10	
42	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	10	
43	弥生土器　高坏	溝　1	〃	6	10	
44	不明石製品	溝　1	〃	6	11	緑泥片岩製
45	石鏃	溝　1	〃	6	11	サヌカイト製
46	石鏃	溝　1	〃	6	11	〃
47	石鏃	溝　1	弥生時代後期	6	11	サヌカイト製
48	石鏃	包含層	〃	6	11	地山直上面より出土
49	石鏃	包含層	〃	6	11	〃
50	石鏃	包含層	〃	6	11	〃
51	石鏃	包含層	〃	6	11	〃
52	スクレイパー	包含層	〃	6	11	〃
53	スクレイパー	包含層	〃	6	11	〃
54	須恵器壺	溝　5	奈良時代	8	12	
55	瓦器椀	土坑6	鎌倉時代以降	8	12	
56	土師質甕	土坑7	〃	8	—	滓焼き
57	瓦質皿	土坑11	〃	9	—	
58	瓦質皿	土坑12	〃	9	12	
59	瓦器椀	土坑12	〃	9	12	
60	土師質羽釜	土坑12	〃	9	12	紀州系？
61	土師質皿	土坑13	〃	9	12	
62	土師質皿	土坑14	〃	9	12	
63	瓦器椀	土坑14	〃	9	12	
64	土師質皿	溝　1	〃	9	—	
65	瓦質皿	溝　1	〃	9	—	
66	瓦器椀	土坑12	〃	9	12	
67	瓦器椀	土坑12	〃	9	12	
68	須恵器壺	石積み遺構15	古墳時代	10	13	短頸壺
69	白磁碗	石積み遺構15	鎌倉時代以降	10	—	
70	埴	石積み遺構15	〃	10	—	
71	灯明皿	石積み遺構15	江戸時代	10	13	植物
72	窯道具	石積み遺構15	鎌倉時代以降	10	14	焼き台
73	擂り鉢	石積み遺構15	〃	10	13	伊賀？
74	仏飯具	石積み遺構15	〃	10	13	瀬戸？
75	磁器碗	石積み遺構15	〃	10	—	
76	磁器碗	石積み遺構15	〃	10	—	
77	磁器碗	石積み遺構15	〃	10	13	
78	磁器碗	石積み遺構15	江戸時代以降	10	13	波佐見
79	磁器碗	石積み遺構15	〃	10	13	〃
80	磁器碗	石積み遺構15	〃	10	13	〃
81	瓦（軒丸）	石積み遺構15	〃	10	14	「泉瓦？」銘
82	蛸壺	石積み遺構15	〃	10	13	アカニシ貝製
83	銭	石積み遺構15	〃	10	13	
84	瓦（道具）	石積み遺構15	〃	—	14	巴文
85	瓦（軒丸）	石積み遺構15	〃	—	14	〃
86	瓦（軒丸）	石積み遺構15	〃	—	14	〃
87	窯道具	石積み遺構15	〃	—	14	焼き台
88	瓦（軒丸）	石積み遺構15	〃	—	14	巴文
89	窯体片	石積み遺構15	〃	—	14	
90	石鏃	石積み遺構15	弥生時代	10	13	
91	瓦器椀	焼土坑16	鎌倉時代以降	8	12	試掘トレンチ

表2　亀川遺跡　出土遺物一覧表

図版番号	器種	出土遺構	年代	図版No.	写真図版No.	備考
1	弥生土器　壺	溝　1	弥生時代後期	12	—	
2	弥生土器　壺	溝　1	弥生時代中期	12	17	
3	弥生土器　底部	溝　1	弥生時代後期	12	17	
4	弥生土器　底部	溝　1	〃	12	17	
5	弥生土器　底部	溝　1	〃	12	—	
6	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	12	17	タタキ痕
7	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	12	17	〃
8	弥生土器　甕底部	溝　1	〃	12	17	〃
9	弥生土器　高坏	溝　1	〃	12	17	
10	スクレイパー	溝　1	〃	12	17	サヌカイト製
11	有舌尖頭器	溝　1	〃	12	19	〃
12	弥生土器　壺	溝　2	〃	12	—	広口壺
13	スクレイパー	溝　2	〃	12	19	サヌカイト製
14	須恵質擂り鉢	溝　9	鎌倉時代以降	12	—	東播系
15	青磁碗	溝　9	〃	12	19	
16	火打ち石	溝　9	江戸時代	12	19	チャート製
17	弥生土器　壺	土坑3	弥生時代後期	13	18	張り付け浮文
18	弥生土器　壺	土坑3	〃	13	18	
19	弥生土器　壺	土坑3	〃	13	18	
20	弥生土器　甕	土坑3	〃	13	18	紀伊系
21	弥生土器　甕	土坑3	〃	13	18	〃
22	弥生土器　鉢	土坑3	〃	13	18	
23	弥生土器　鉢	土坑3	〃	13	18	
24	瓦器椀	包含層	鎌倉時代以降	14	19	
25	瓦器椀	焼土坑5	〃	14	19	
26	土師質皿	包含層	〃	14	19	
27	瓦質皿	包含層	〃	14	19	
28	須恵質鉢	包含層	〃	14	19	東播系
29	青磁碗	包含層	〃	14	19	龍泉窯文
30	白磁碗	包含層	〃	14	19	
31	白磁碗	包含層	〃	14	19	
32	磁器碗	井戸18	江戸時代	15	21	染付け
33	磁器碗	井戸18	〃	15	—	唐津
34	磁器碗	井戸18	〃	15	21	伊万里香炉
35	磁器碗	井戸18	〃	15	21	
36	磁器碗	井戸18	〃	15	—	伊万里
37	磁器土瓶蓋	井戸18	—	15	21	鉄釉 近・現代
38	磁器碗	土坑19 井戸20	江戸時代	16	20	染付け
39	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	16	20	〃
40	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	16	20	〃
41	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	16	20	〃
42	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	16	20	〃
43	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	16	21	〃
44	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	16	21	〃
45	磁器碗蓋	土坑19 井戸20	〃	16	21	
46	磁器碗蓋	土坑19 井戸20	〃	16	21	
47	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	16	21	湯呑み
48	磁器皿	土坑19 井戸20	〃	16	21	染付け
49	陶器蓋	土坑19 井戸20	〃	16	21	
50	陶器蓋	土坑19 井戸20	〃	16	21	
51	陶器壺	土坑19 井戸20	〃	16	20	油差し
52	陶器猪口	土坑19 井戸20	〃	16	21	銅猪口
53	灯明皿	土坑19 井戸20	〃	17	—	施釉
54	陶器行平蓋	土坑19 井戸20	〃	17	22	トビカンナ
55	陶器行平蓋	土坑19 井戸20	〃	17	22	〃
56	陶器行平鍋	土坑19 井戸20	〃	17	22	煤付着痕
57	陶器土瓶	土坑19 井戸20	〃	17	22	
58	陶器鉢	土坑19 井戸20	〃	17	22	片口
59	陶器焙烙	土坑19 井戸20	〃	17	23	煤付着痕
60	陶器焙烙	土坑19 井戸20	〃	17	23	〃
61	陶器焙烙	土坑19 井戸20	〃	17	23	〃
62	陶器焙烙	土坑19 井戸20	〃	17	23	〃
63	陶器焙烙	土坑19 井戸20	〃	17	23	〃
64	陶器焙烙	土坑19 井戸20	〃	17	23	〃
65	陶器焙烙	土坑19 井戸20	〃	17	23	〃
66	陶器焙烙	土坑19 井戸20	〃	—	23	〃
67	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	—	20	
68	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	—	20	
69	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	—	20	
70	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	—	20	
71	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	—	21	
72	磁器碗	土坑19 井戸20	〃	—	21	
73	陶器土瓶	土坑19 井戸20	〃	—	22	

写　真　図　版

図版１　阪南市

図版2　試掘調査区全景

井関・亀川遺跡試掘トレンチ全景（北東から）

井関・亀川遺跡試掘トレンチ全景（北西から）

井関遺跡　試掘トレンチ全景（北東から）

亀川遺跡　試掘トレンチ全景（北西から）

溝1　全景（北から）

溝1、土坑3　全景（南西から）

溝1断面B、土坑2　全景（北から）

溝1断面D（南西から）

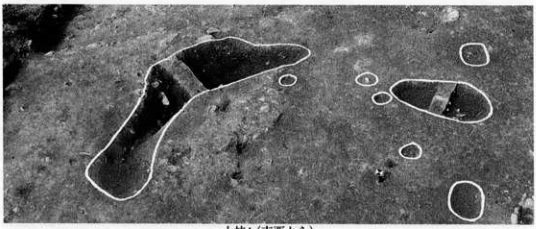
溝1断面（F）（南から）

溝1断面C（南西から）

溝1断面（E）（南西から）

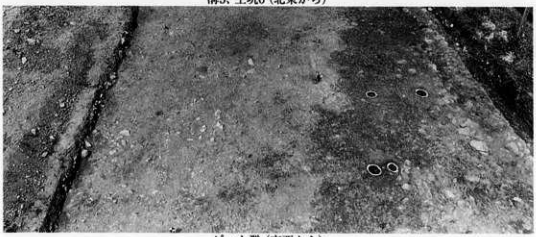
溝1断面B（北東から）

溝1断面C（南西から）



土坑4（南西から）

溝5、土坑6（北東から）



ピット群（南西から）

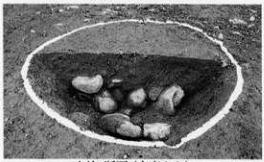
石積み遺構15　全景（西から）

溝1、土坑群　近景（北東から）

溝1、土坑群　近景（北東から）

溝1、土坑群　近景（南西から）

溝1、土坑　近景（北東から）


土坑2断面（南東から）

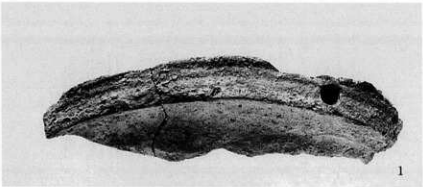
土坑19断面（南から）

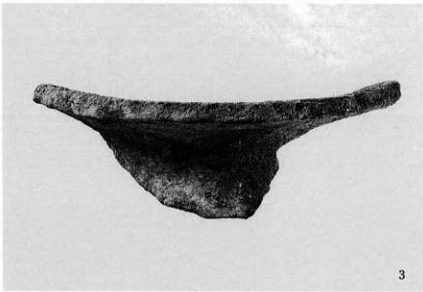
土坑17断面（南東から）

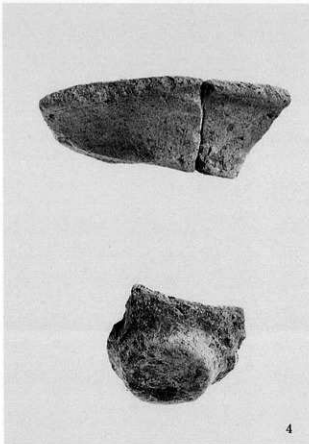
土坑18断面（南から）

土坑20断面（北から）

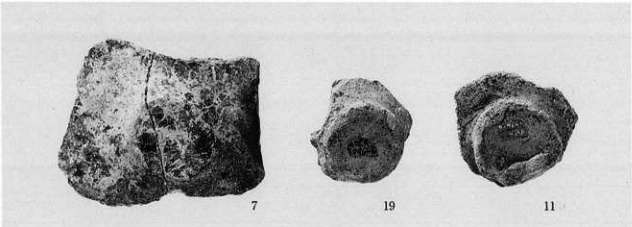
土坑16断面（西から）

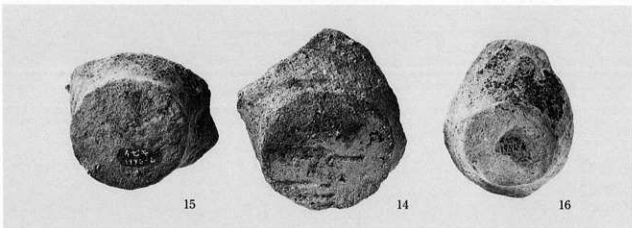


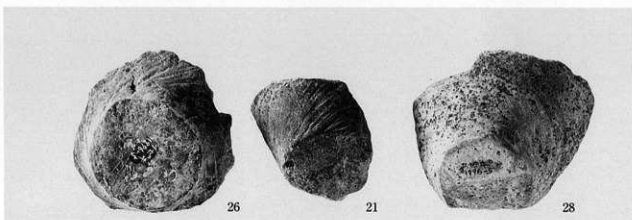


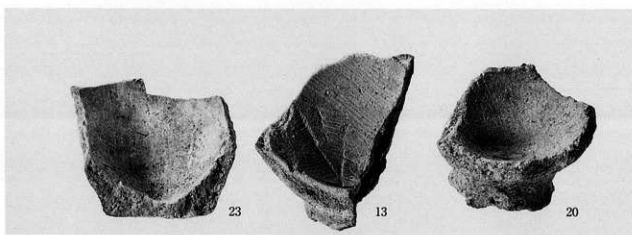


溝1. 弥生土器（1·3·4·5·6壺、8甕）

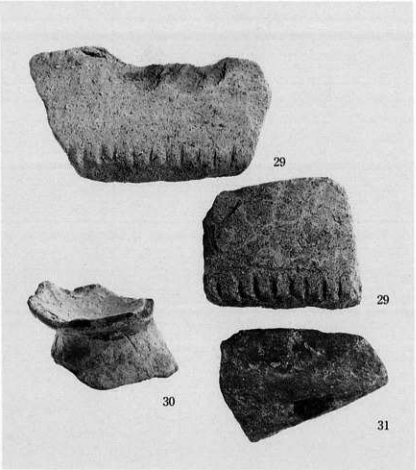


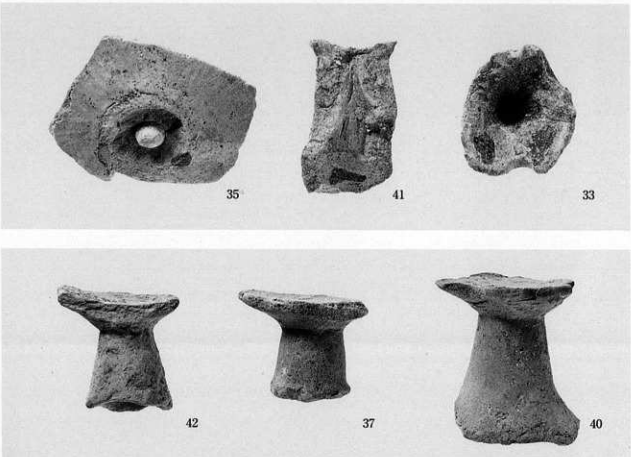




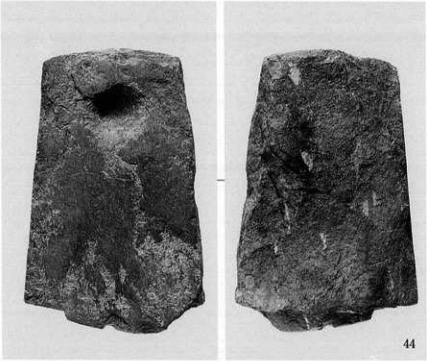


溝1. 弥生土器底部

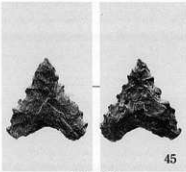




溝1. 弥生土器（29壺、30・31・33・35・37・40～43高坏）

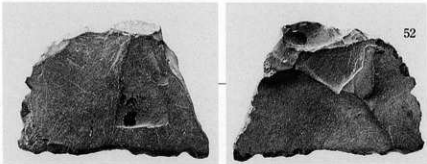


溝1. 不明石製品

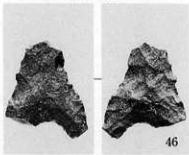


溝1. 石鏃

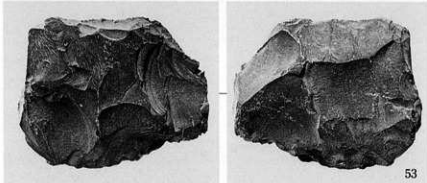
溝1. 石鏃



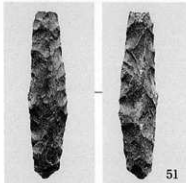
包含層. スクレイパー



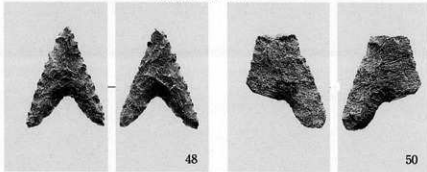
溝1. 石鏃



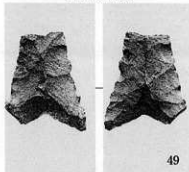
包含層. スクレイパー



包含層. 石錐

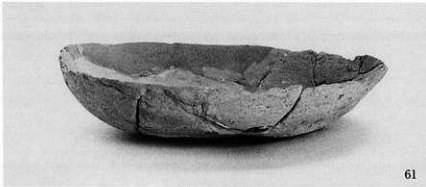


包含層. 石鏃　　包含層. 石鏃



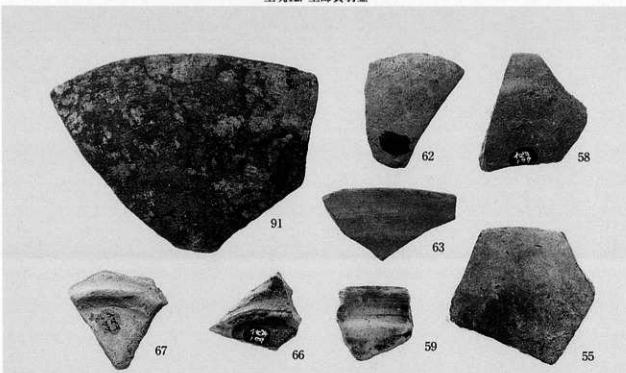
包含層. 石鏃

溝5. 須恵器壺

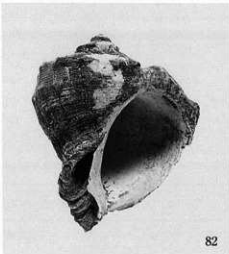


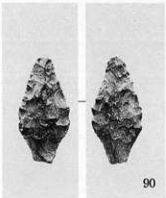
土坑13. 土師質皿

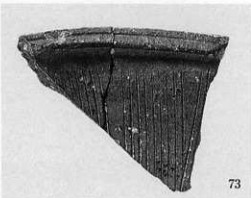
土坑12. 土師質羽釜

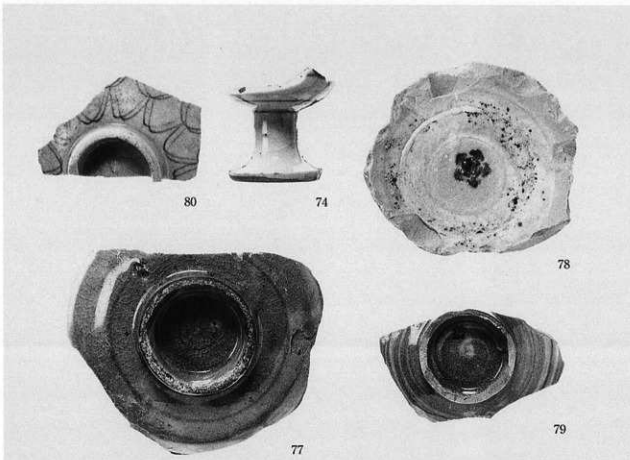


土坑6. 55瓦器椀　土坑12. 58瓦質皿、59・66・67瓦器椀　土坑14. 62土師質皿、63瓦器椀　土杭16（試掘トレンチ）91瓦器椀

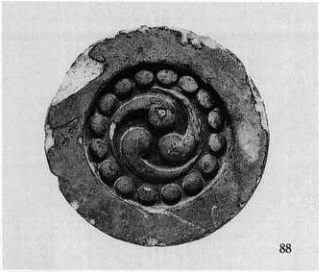


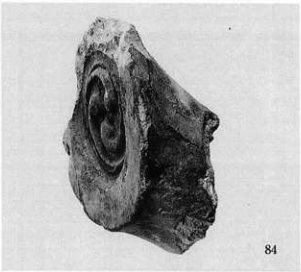




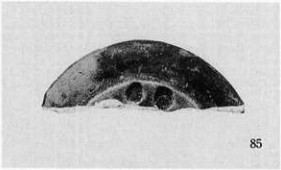


石積み遺構15. 68須恵器壺、83銭、82アカニシ貝蛸壺、90石鏃、陶磁器（71灯明皿、73擂り鉢、74仏飯具、77～80椀）


88


84

81


85

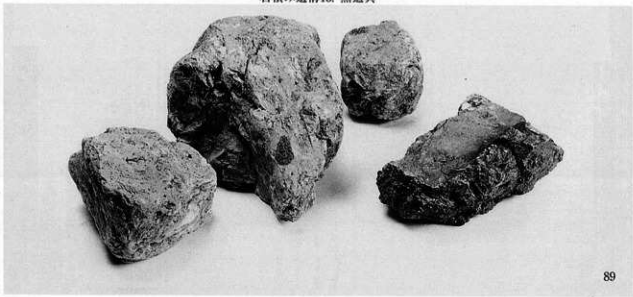
86

石積み遺構15. 瓦

72

87

石積み遺構15. 窯道具


89

石積み遺構15. 窯体片

溝1、井戸14・15・16・17　全景（南から）

溝1、井戸12・14・15、土坑13　全景（南東から）

溝2、焼土坑5、土坑3　全景（南西から）

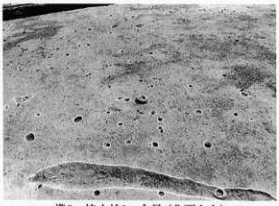
溝2、焼土坑5　全景（南西から）

土坑群全景（南西から）

溝2、焼土坑5　全景（北から）

焼土坑5　近景（南西から）

掘立柱建物4、溝1・2、焼土坑6・7　全景（西から）


溝2、焼土坑8　全景（北西から）

溝9・10　全景（南から）

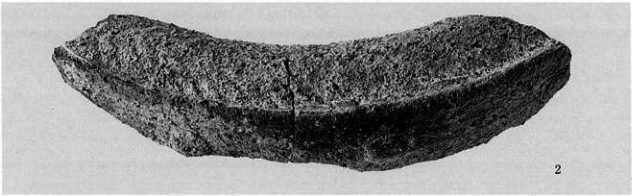
溝10断面　近景（南から）

井戸20・22、土坑19・21　全景（北から）

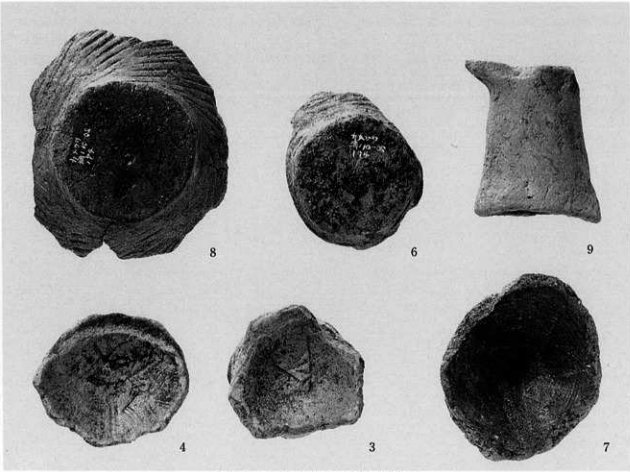
土坑19　遺物出土状況（北から）

井戸23　近景（南から）

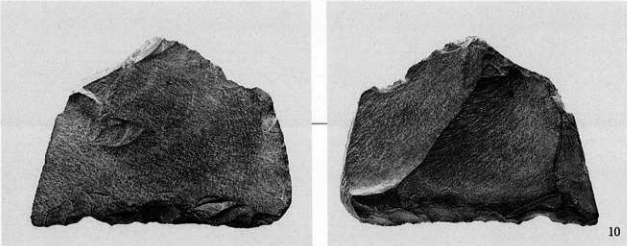
井戸12　断割り（南から）



溝1. 弥生土器壺

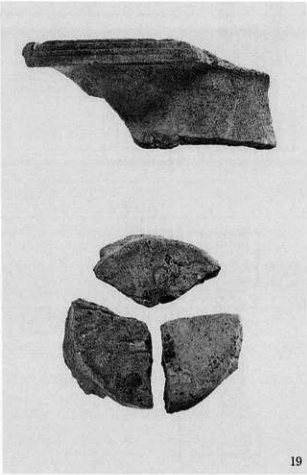


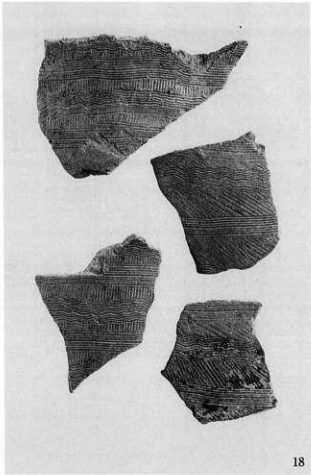
溝1. 弥生土器（3·4·6～8底部、9高坏）

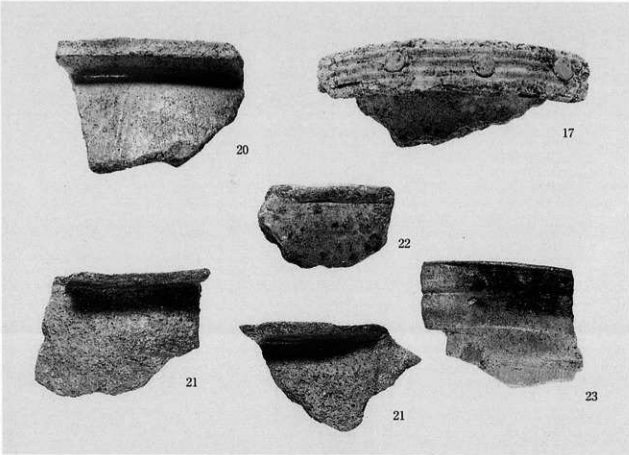


溝1. スクレイパー

図版18　亀川遺跡　出土遺物（2）

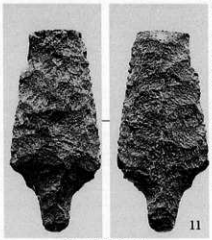






土坑3. 弥生土器（17～19壺、20・21甕、22・23鉢）

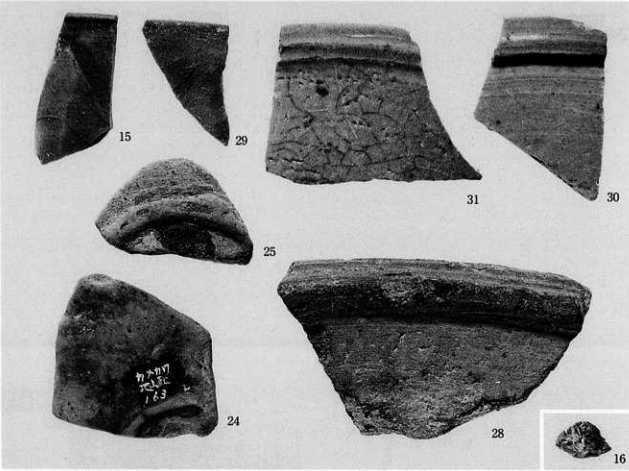
溝2. スクレイパー



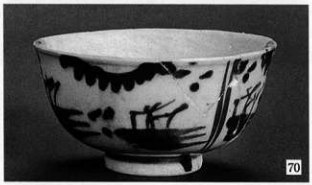
溝1. 有舌尖頭器

包含層. 瓦質皿

包含層. 土師質皿

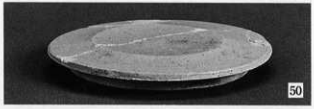


溝9. 15青磁碗、16火打ち石　土坑5. 25瓦器椀　包含層. 24瓦器椀、28須恵質鉢、29青磁碗、30・31白磁碗



土坑19・井戸20. 磁器（38～42・67～70碗、51油注し）

井戸18. 磁器（32・34・35碗、37蓋）



土坑19・井戸20. 陶磁器（45・46・49・50蓋、43・44・71・72碗、47小型碗（湯呑み）、48中皿、52餌猪口）

55

58

54

56

57

73

土坑19・井戸20. 陶器（54・55行平蓋、56行平場、57・73土瓶、58片口鉢）

59

60

61

62

63

64

65

66

土坑19・井戸20. 陶器焙烙

報　告　書　抄　録

ふ り が な	いぜき・かめかわ いせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	井関・亀川遺跡発掘調査報告書
副　書　名	一般国道26号線第二阪和国道建設事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書
シリーズ番号	第46集
編 著 者 名	服部美都里
編 集 機 関	財団法人　大阪府文化財調査研究センター
所　在　地	〒536-0016　大阪府大阪市城東区蒲生２丁目11番３号　小森ビル４Ｆ
発行年月日	1999年８月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
井関遺跡 （いぜき いせき）	大阪府阪南市 （おおさかふ はんなんし） 石田所在 （いしだしょざい）	27232	44	34° 20′ 09″	135° 15′ 03″	1997.5.19 ～ 1997.8.25	6,547	一般国道26号線第二阪和国道建設事業に伴う調査
亀川遺跡 （かめかわ いせき）				34° 20′ 22″	135° 15′ 21″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井関遺跡	集　落	弥生～江戸時代	弥生時代 溝、土坑	壺・甕・高坏 石鏃、石錐、スクレイパー、不明石製品	
			奈良時代　溝	須恵器壺	
			鎌倉時代以降 溝、土坑	土師質甕・羽釜・皿 瓦器椀	
			江戸時代以降 石積み遺構	須恵器壺、陶磁器 瓦、窯道具、銭 蛸壺	
亀川遺跡	集　落	弥生～江戸時代	弥生時代 溝、土坑	壺・甕・高坏 スクレイパー 有舌尖頭器	
			鎌倉時代以降 掘立柱建物 土坑、溝	瓦器椀、瓦質皿 土師質皿、火打ち石 青磁・白磁碗	
			江戸時代以降 井戸、土坑	陶磁器	

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第46集

井関・亀川遺跡発掘調査報告書

―― 一般国道26号線第二阪和国道建設事業に伴う発掘調査報告書 ――

1999年8月31日

編集・発行　財団法人　大阪府文化財調査研究センター

〒536-0016　大阪市城東区蒲生2丁目11番3号小森ビル4階
TEL. 06-6934-6651(代)　FAX. 06-6934-7029

印刷・製本　ダイコウ印刷株式会社

〒544-0034　大阪市生野区桃谷5丁目3番3号
TEL. 06-6712-6709(代)　FAX. 06-6716-5881